

第239図 SB09 平・断面・出土遺物実測図

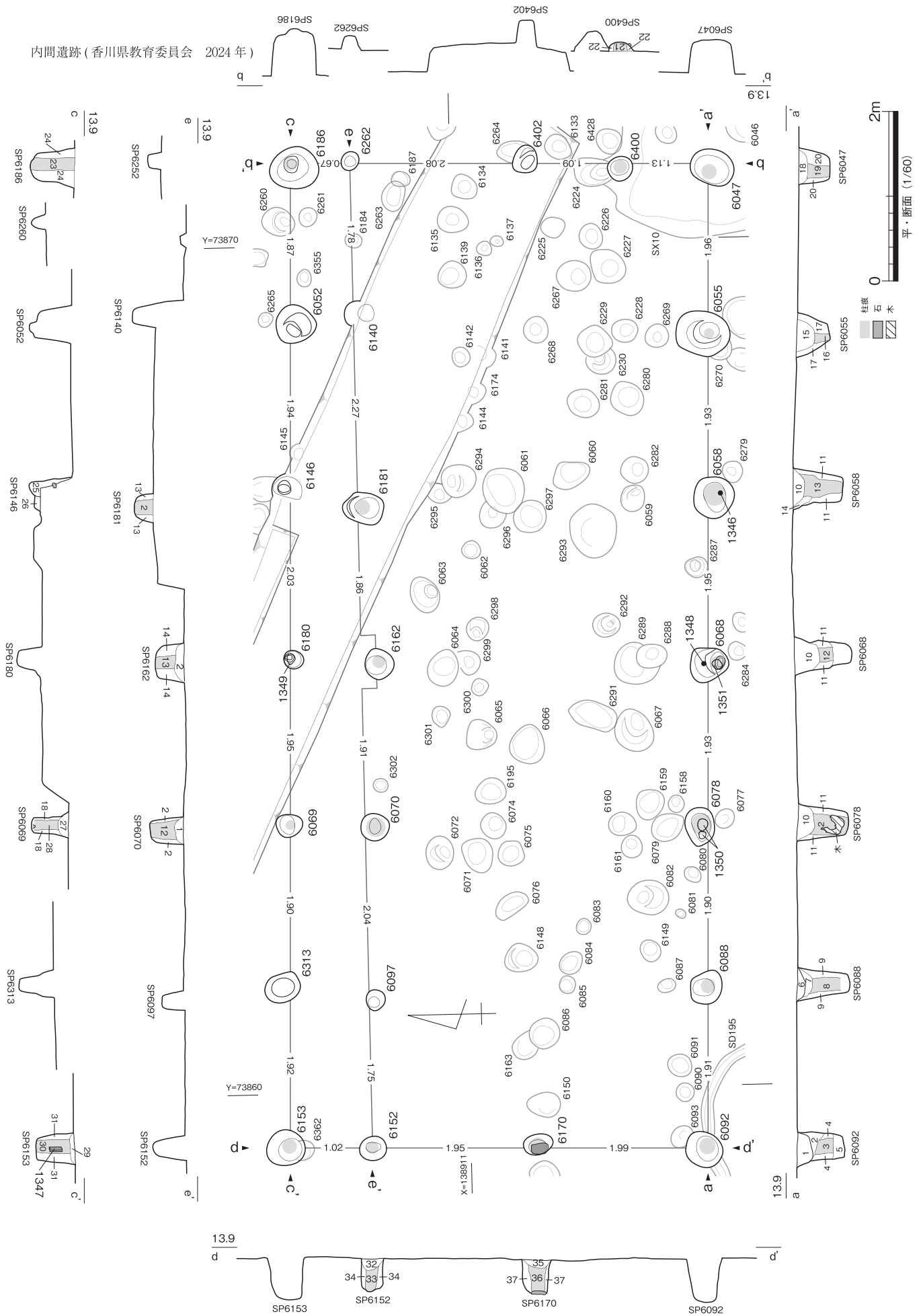
6. 近世以降 (第238図)

近世の遺構は、6区のSB10を中心とした建物遺構と13区SD271等の水路からなる。このうち水路は概ね中世段階を踏襲したあり方を示す。

掘立柱建物

SB09 (第239図)

6区1面中央北部で検出した掘立柱建物で、SP6387のみ第2面で検出した。調査時に建物を復元している。SD196やSB08と重複し、SD196より先行するが、既述したようにSB08との先後関係は不詳である。梁間2間(3.27m)、桁行2間(4.28m)、床面積約14.00㎡、主軸方向N 6.84° Eに配された南北棟の側柱建物を復元する。桁行西列中央穴を欠く。平面形(柱穴配置)は完全な矩形とはならず、桁行西列が東列と比して0.26m短い。柱穴は、第2面で検出したSP6387を除いて、長径0.28~0.36mの略円ないし不整楕円形を呈し、底面の標高13.14~13.40m、残存深0.09~0.41mを測る。桁行東列のSP6197とSP6387が浅い以外は、底面の標高13.2mを中心に概ね揃っている。SP6381で径0.14mの柱痕を確認し、SP6207で柱材が出土した。なお、根石や詰石は確認していない。

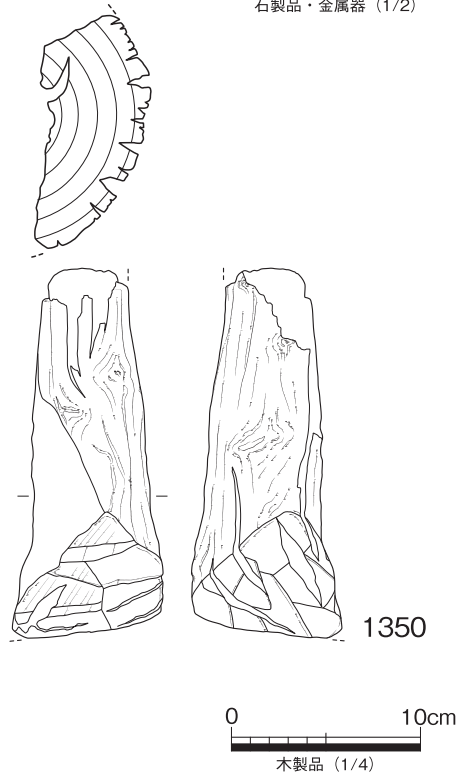
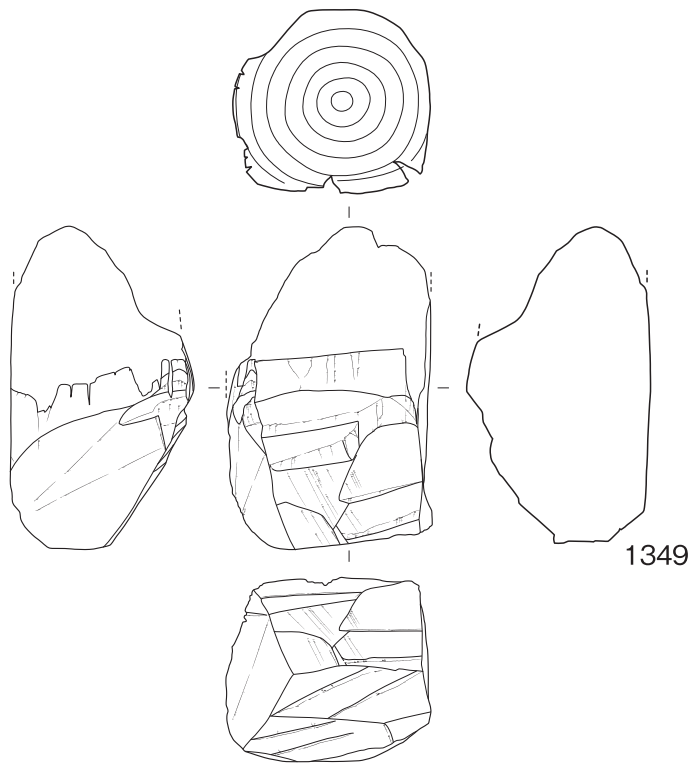
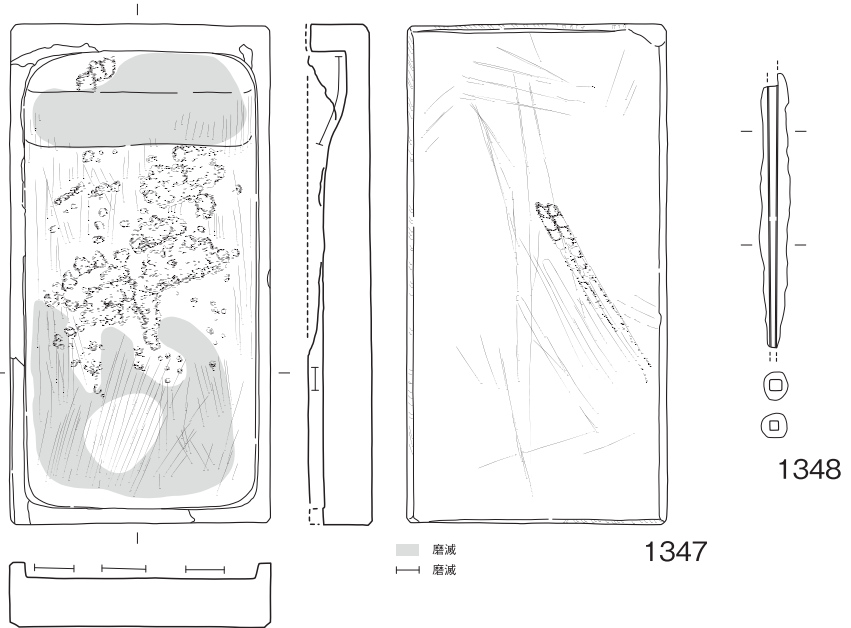
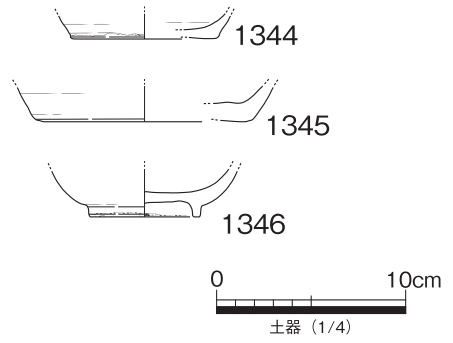


第 240 図 SB10 平・断面図

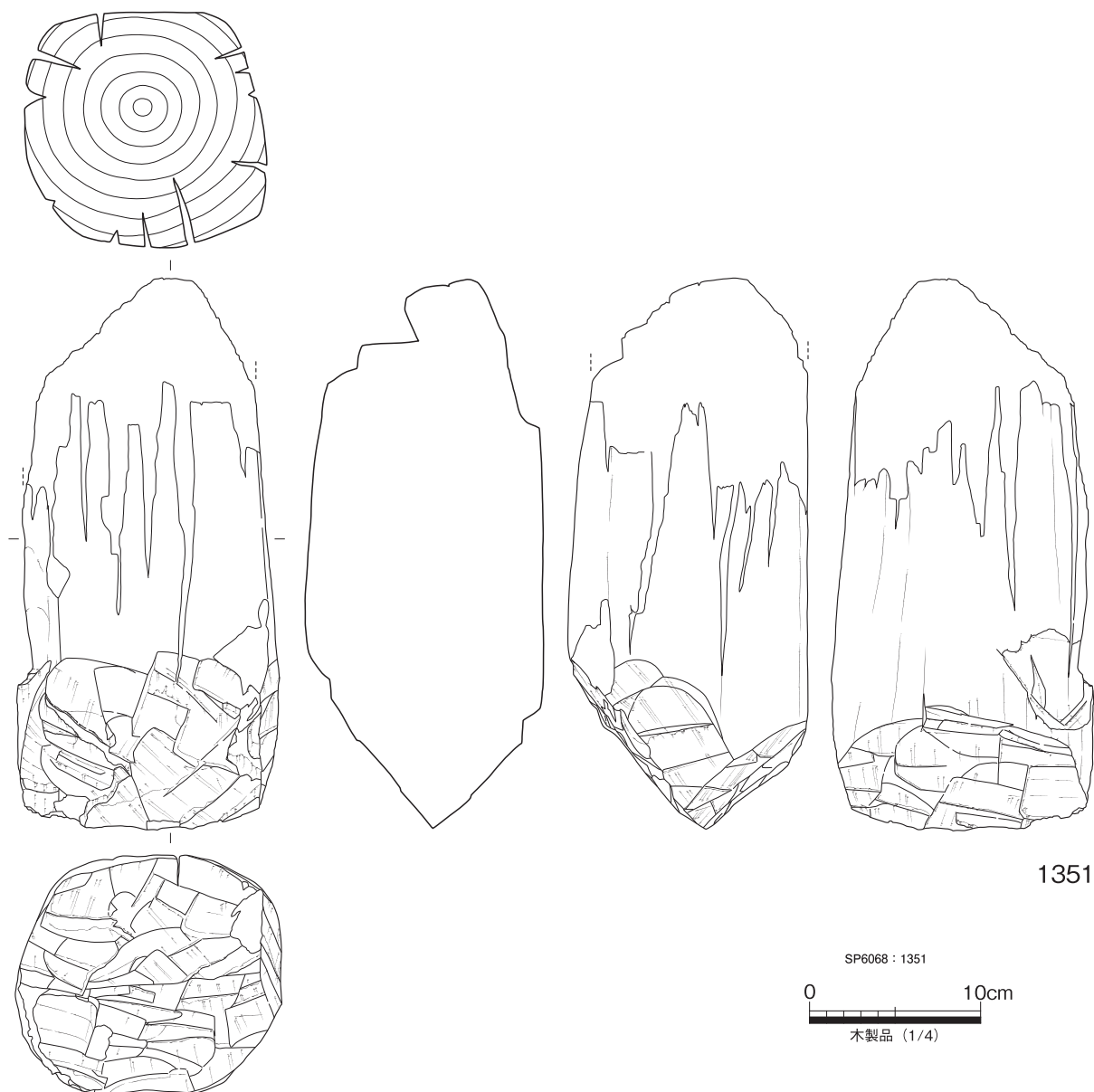
a-a' b-b' c-c' d-d' e-e'

- 1 10YR4/2 灰黄褐色細礫混じり粘質シルト
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色細礫混じり粘質シルト
- 3 10YR5/1 褐灰色細礫混じり粘質シルト
- 4 7.5Y5/2 灰オリーブ色細礫混じり粘質シルト
- 5 5BGS/1 青灰色細礫混じり粘土 (上面 10 cm 程柱穴埋土?)
- 6 10YR5/2 灰黄褐色細礫混じり粘質シルト (下端に炭化物含む)
- 7 10YR5/2 灰黄褐色粗砂混じり粘質シルト (6 層よりも砂質強い)
- 8 5YR4/1 褐灰色細礫混じり粘土
- 9 10YR4/2 灰黄褐色細礫混じり粘土
- 10 10YR6/2 灰黄褐色細礫混じり粘質シルト
- 11 10YR5/4 にぶい黄褐色細礫混じり粘質シルト
- 12 10YR5/2 灰黄褐色細礫混じり粘質シルト
- 13 10YR4/4 褐色細礫混じり粘質シルト
- 14 10YR5/6 黄褐色細礫混じり粘質シルト
- 15 10YR3/4 暗褐色粗砂混じり粘質シルト (10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂混じり粘質シルトブロックを多量に含む)
- 16 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じり粘質シルト
- 17 10YR3/2 黒褐色粗砂混じり粘質シルト
- 18 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂混じり粘質シルト
- 19 10YR5/2 灰黄褐色細礫混じり粘質シルト (10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混じり粘質シルトブロックを多量に含む)
- 20 10YR4/2 灰黄褐色細礫混じり粘質シルト
- 21 10YR3/2 黒褐色細礫混じりシルト
- 22 10YR5/3 にぶい黄褐色細礫混じりシルト
- 23 2.5Y5/4 黄褐色細礫混じり粘質シルト
- 24 10YR4/2 灰黄褐色細礫混じり粘質シルト
- 25 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粗砂混じり粘質シルト
- 26 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じり粘質シルト
- 27 2.5Y5/4 黄褐色粗砂混じり粘質シルト
- 28 10YR6/2 灰黄褐色粗砂混じり粘質シルト
- 29 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂混じり細砂質シルト
- 30 10YR5/2 灰黄褐色粗砂混じり細砂質シルト
- 31 10YR3/3 暗褐色粗砂混じり粘質シルト
- 32 10YR4/3 にぶい黄褐色細礫混じり砂質シルト
- 33 10YR4/2 灰黄褐色細礫混じり砂質シルト
- 34 10YR5/4 にぶい黄褐色細礫混じり粘質シルト
- 35 10YR5/3 にぶい黄褐色中砂混じり粘質シルト
- 36 10YR4/2 灰黄褐色中砂混じり粘質シルト
- 37 10YR5/4 にぶい黄褐色中砂混じり粘質シルト

- SP6047 : 1345
 SP6058 : 1346
 SP6068 : 1348・1351
 SP6078 : 1350
 SP6140 : 1344
 SP6153 : 1347
 SP6180 : 1349



第 241 図 SB10 出土遺物実測図 1



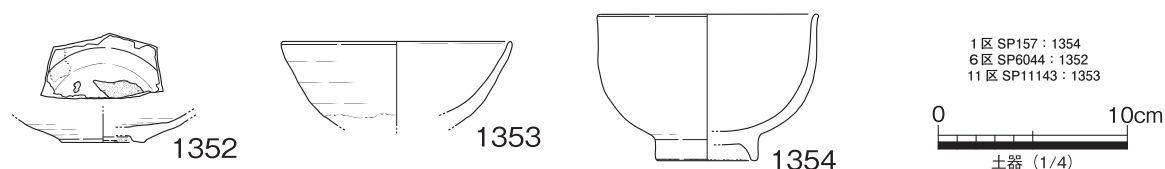
第 242 図 SB10 出土遺物実測図 2

遺物は、SP6381 を除いた各柱穴より、土師質土器皿等の小片が各々 1～3 点出土した。**1342** は、土師質土器杯。外面は 2 次的な被熱のためか黒化している。底部は糸切りの可能性があるが、マメツのため判然としない。**1343** は、ツガ属（第 4 章第 3 節参照）の径 6.5cm 以上の芯持丸木の柱材である。腐食が顕著で調整等は不明瞭だが、底面にのみヨキ痕が認められた。また、柱材については放射性炭素年代測定（第 4 章第 7 節参照）を実施し、16 世紀中葉～17 世紀中葉を前後する年代値が得られた。

出土した土器資料には、**1342** のように 13 世紀前半代を中心とした時期に位置付けられるものも含まれるものの、上述した放射性炭素年代測定の結果より、本建物は 17 世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

SB10（第 240～242 図）

6 区 1 面南東隅付近で検出した掘立柱建物で、SP6313 等のいくつかの柱穴は、1 面で確認できず 2



第243図 近世柱穴出土遺物実測図

面で検出した。調査時に建物を復元している。SD194やSX10の上面より掘り込まれる。梁間2間(4.10m)、桁行6間(11.61m)、床面積約47.60㎡、主軸方向N 88.48°Wとほぼ正方位に配された北面に庇を伴う東西棟の側柱建物を復元する。柱通りは、SP6162を除いて概ね揃っている。庇を含めた柱穴は、長径0.23～0.61mの楕円ないし不整隅丸方形形状を呈し、底面の標高13.14～13.48m、残存深0.27～0.55mを測る。柱穴底面の標高は、13.14～13.48mと一定しないが、概ね13.2m前後のものが多い。SP6153等の多くの柱穴で径0.15～0.24mの柱痕を確認し、そのうちSP6068、SP6078、SP6180の各柱穴で柱材が遺存していた。また、SP6170で根石が出土し、SP6153では柱痕より石硯が出土したが、これは詰石として転用された可能性が考えられる。

遺物は、図示した以外に、SP6088、SP6097、SP6162、SP6402を除く各柱穴より、器種不詳の土器や須恵器、土師質土器皿・杯・鍋・足釜等の小片が1～10点程度出土した。1344・1345は、土師質土器杯である。いずれも底部ヘラ切りで、1344はナデ調整を加える。1346は肥前系陶器碗の底部片。高台畳付けを除いて全面に透明釉を施釉する。1347は、長さ13.2cm、幅7cmの粘板石製の石硯である。SP6153の柱抜き取り孔に縦位に挿入され、硯上面に拳大の花崗岩礫が置かれていた。周縁の一部を折損する以外はほぼ完形で出土した。1349～1351は柱材である。いずれも芯持材で、1350は小片化していたため、残存状況のよい破片をのみ図化した。1349は10cm角、1351は14cm角の角柱である。下面には、いずれも刃幅5cm以上のヨキ痕がみられる。樹種はいずれもクリ(第4章第3節参照)であった。これら3点の柱材について、放射性炭素年代測定を実施した(第4章第7節参照)。分析の結果、1349は18世紀前半～19世紀初頭、1350は17世紀前半～17世紀中葉、1351は18世紀前葉～後葉の年代値を得た。

1346や放射性炭素年代測定の結果より本建物は、17世紀後半～18世紀前葉を中心とした時期に位置付けられると考える。

柱穴(第243図)

第234図に、建物を構成しない柱穴より出土した遺物を掲載した。1352は肥前系灰釉皿の底部片。内面は灰釉を施した後、見込みに砂目が残る。1353は同灰釉碗。内外面灰釉を施し、底部は露胎とする。1354は同碗。高台畳付け以外、全面に透明釉を施釉する。高台端に砂が付着する。

土坑

SK023(第244図)

5区北東部周辺で検出した土坑である。長軸1.02m、短軸0.91m、主軸方向N 41.85°Wに配された、やや南北に長い平面楕円形を呈する。残存深0.10mと浅く、断面形は周壁が直に近く掘り込まれ、底面が概ね平坦な箱形を呈する。埋土は4層に細分され、上層(1層)と下層(2～4層)に大別する。上層は褐灰色極細砂で、橙色シルトをラミナ状に含み、周囲より径約86cmの環状の木質遺物が出土した。

北部の一部を欠損するが、本来は全周していたものと考えられ、後述するSK026例より曲物の可能性が想定される。曲物は脆弱なため取り上げは困難であったが、明確な底板は無く、側材のみが遺存していた。底板は腐食したものと考えられる。下層は、黄褐色偽礫を含む黄灰色粘土が層厚約6cmに水平に堆積していたことから、曲物を据えるための置土の可能性が高い。底面に粘土を張っていることから、井戸の可能性は低く、水溜めもしくは肥溜めの可能性が高いと考える。

遺物は図示した以外に、土師質土器焙烙や瓦質土器焙烙、器種不詳の施釉陶器等の小片が15点程度出土した。1355は、瓦質土器焙烙。形態や角閃石細粒を含む胎土の点から、高松市御厩産の製品と思われる。外面には使用時の煤が付着する。出土遺物より本遺構は、18世紀後葉～19世紀初頭に位置付けられる。

SK024 (第244図)

5区北東部周辺で検出した土坑である。長軸0.92m、短軸0.90m、主軸方向N 80.45°Wに配された、やや東西に長い歪な不整楕円形状を呈する。残存深0.05mで、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は褐灰色中砂の単層であった。

遺物は、出土しておらず詳細な時期については不詳である。周辺のSK023等と規模等の形状が近似することから、当該期の遺構の可能性を想定する。

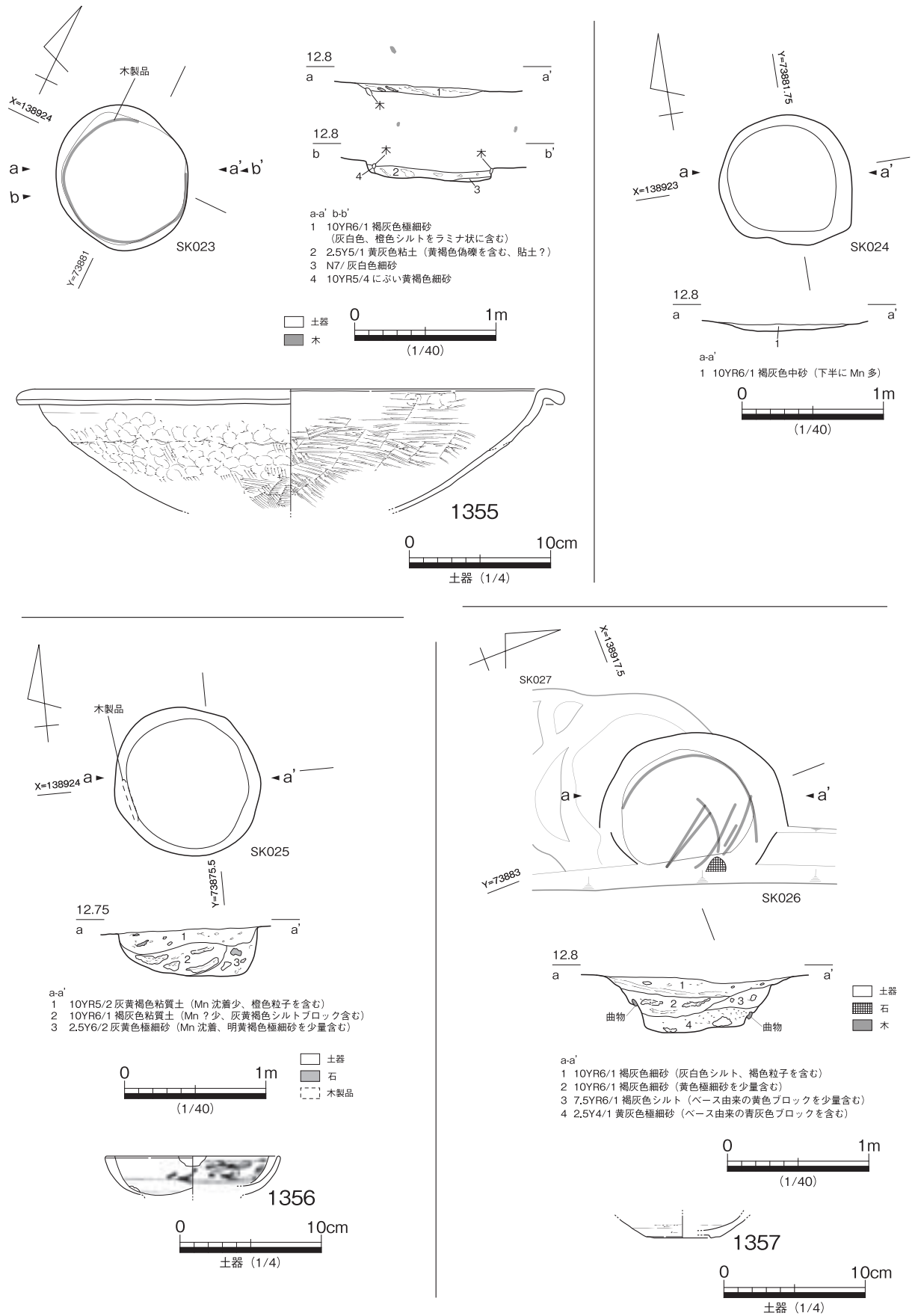
SK025 (第244図)

5区中央北半部周辺で検出した土坑である。長軸1.04m、短軸1.01m、平面形は略円形を呈する。残存深0.33m前後で、断面形は底面が概ね平坦な箱形を呈する。埋土は3層に細分され、灰色系の粘質土ないし極細砂がレンズ状に堆積していた。また2層中には、ブロック土が多量に含まれ、人為的に埋め戻された置土の可能性が考えられる。掘り方の西辺に長さ約56cmの木質遺物が出土した。腐食が顕著なため器種を特定できないが、掘り方が略円形を呈することや、近接してSK023やSK024が所在することから、本遺構も曲物が据え付けられていた可能性が考えられ、水溜めないし肥溜めの機能が想定される。

遺物は図示した以外に、土師質土器皿や十瓶山周辺窯産須恵器碗、器種不詳の軟質施釉陶器の小片が各1点出土した以外に、自然木等の植物遺体が少量出土している。1356は、肥前系染付磁器皿の口縁部片。外面は茎のみ線描きで、葉を濃みで描いた唐草文、内面も唐草状に連続した模様を描く。出土遺物は乏しいが、1356より18世紀前葉に位置付けられ、SK023に先行する可能性を想定する。

SK026 (第244図)

5区南東隅部で検出した土坑で、後述するSK027の上面より掘り込まれる。また、東端部は調査区外へ延長するが、概ね全形は判断できる。長軸1.31m、短軸1.05m以上、平面略円形ないし南北にやや長い楕円形を呈するとみられる。残存深0.37m、断面形は底面が平坦な逆台形状を呈する。埋土は4層に細分され、上下2層に大別する。上層(1～3層)は、本遺構機能時もしくは廃棄後の堆積層で、褐灰色シルトないし細砂がレンズ状に堆積する。下位層(3層)に黄色ブロックが混入するのは、壁面の崩落に伴う再堆積の可能性が高い。本層下端付近で径約90cmの曲物の側板を検出した。曲物は、基底部の高さ数cmが残存するのみで、上半部は遺構廃棄時に取り出されたのか遺存していない。また東半



第244図 SK023～SK026 平・断面・出土遺物実測図

部は設置時の状態を維持するものの、東半部は打ち割られて折り重なるように廃棄された状況で出土した。本遺構においても底板は確認されていない。下層は、黄灰色極細砂でブロック土をやや多量に含むことから、人為的な置土(貼床層)の可能性が高い。以上の検出状況より、本遺構は、上述したSK023やSK025同様に、水溜めもしくは肥溜めの可能性が高いと考える。

遺物は、図示した以外に、器種不詳の肥前系染付磁器片のほか、土師質土器鉢の小片各1点と、自然木や竹等の植物遺体が出土した。1357は、瀬戸美濃系施釉陶器行平ないし土瓶の底部片か。体部上位に灰釉を施す。体部下半から高台、内面は無釉である。出土遺物より本遺構は、19世紀中葉を前後する時期に位置付けられると考える。

SK027(第245図)

5区南東隅部で検出した土坑で、上述したSK026より先行する。掘り方北端部がSK026に削奪され、東肩部の一部は調査区外へ延長するため、全形は不詳である。長軸2.0m以上、短軸1.32m以上、主軸方向N36.06°Eに配された、南北に長いやや歪な長楕円形状を呈するとみられる。南半0.87mはスロープ状に緩やかに掘り込まれ最大残存深0.05mを測り、北端部は残存深0.37mと周壁が直に近く掘り込まれ、底面が平坦な断面箱形を呈する。南半部のスロープ状の部分は、別遺構が重複しているか、遺構の埋没過程で、雨水等による浸食で生じたものかと思われるが、断定は困難である。埋土は灰褐色系細砂や粘土が水平堆積し、各層には上述したようにブロック土が少量ながら含まれることから、人為的に埋め戻された可能性が高いと考えられる。

遺物は出土しておらず詳細な時期を特定できないが、上述したようにSK026より先行し、埋土が人為的な埋戻し土で充填されていることからすると、SK026の開削直前に埋め戻された可能性も想定され、SK026と時期的に近接した遺構と判断する。

SK028(第245図)

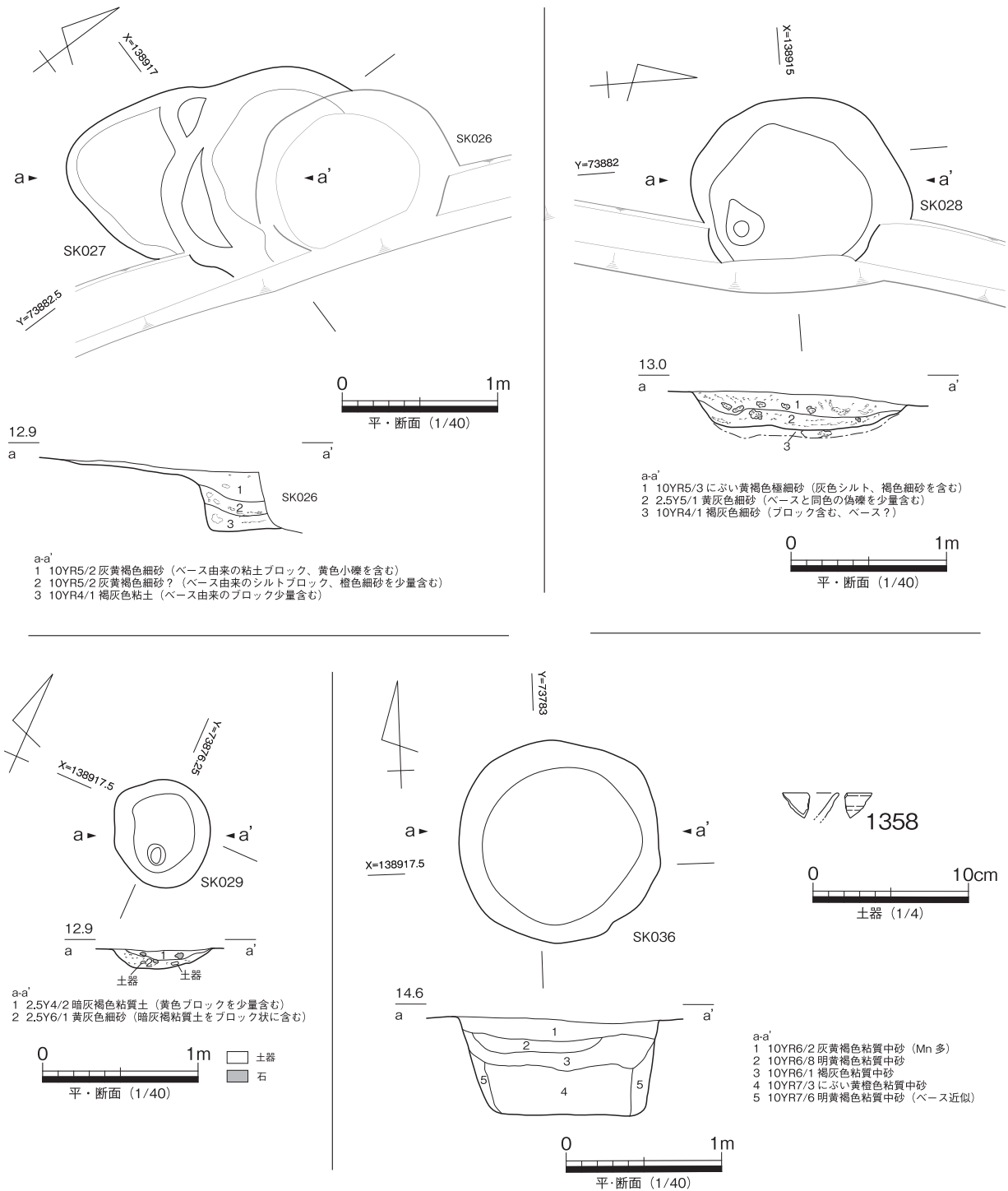
5区南東隅部で検出した土坑である。遺構の東端部は調査区外へ延長するが、概ね全形は判断される。長軸1.43m、短軸1.04m以上、平面形は略円ないし楕円形状を呈するとみられる。残存深0.22mで、断面形は底面が概ね平坦な逆台形状を呈する。埋土は2層に細分され、黄色系細砂が水平堆積していた。埋土中には偽礫等が含まれ、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、器種不詳の土器小片2点が出土した。出土遺物より時期を特定することは困難であるが、上述したSK027等と形状や埋土が近似することから、当該期の遺構の可能性を想定する。

SK029(第245図)

5区南西部付近で検出した土坑である。長軸0.67m、短軸0.60m、主軸方向N35.1°Eに配された、平面形はやや南北に長い歪な隅丸方形形状を呈する。残存深0.12mと浅く、断面形は皿状ないし碗底状を呈する。埋土は2層に細分され、灰色系粘質土と細砂がレンズ状に堆積していた。下位層には少量の土器小片やブロック土が比較的少量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性が高いと考えられる。

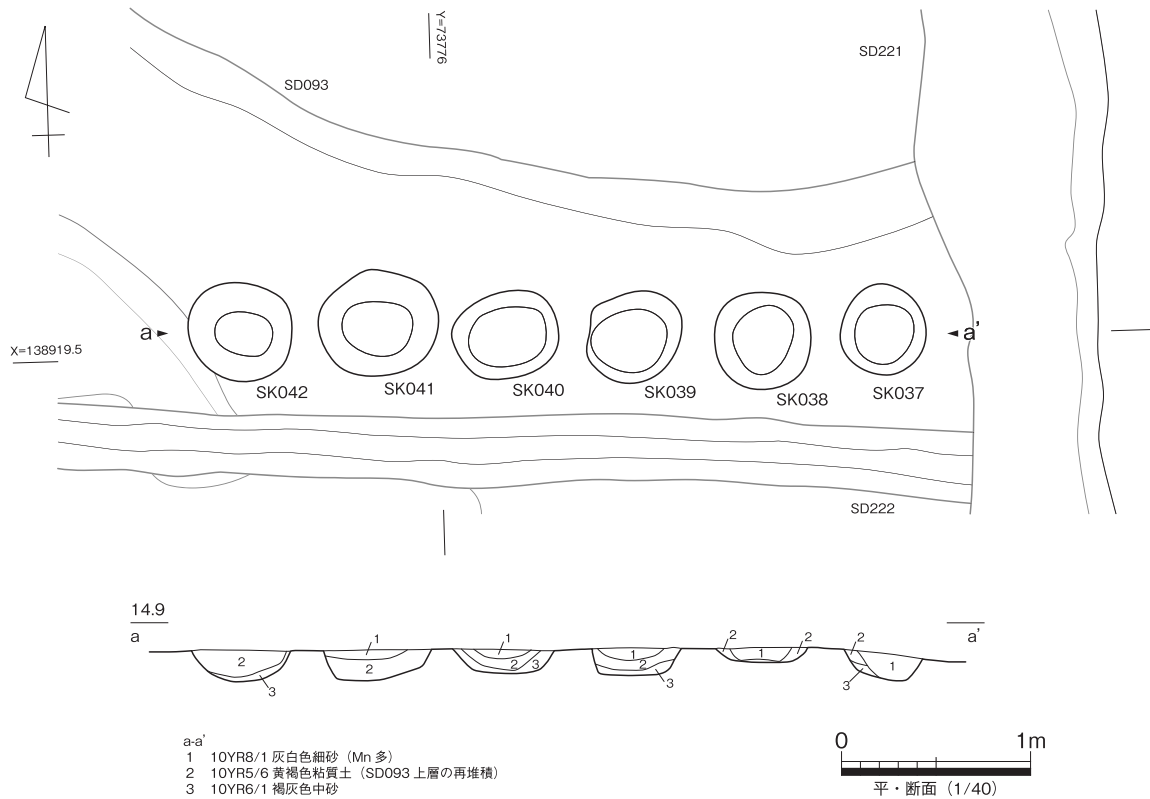
遺物は、器種不詳の土器小片5点が出土した。出土遺物より時期を特定することは困難であるが、周辺のSK027等と埋土が近似することから、当該期の遺構の可能性を想定する。



第 245 図 SK027 ~ SK029・SK036 平・断面・出土遺物実測図

SK036 (第 245 図)

8区中央東半部で検出した土坑である。SD093より後出する。平面形は、径1.27m前後の略円形を呈する。残存深0.61m、断面形は周壁が直に近く掘り込まれ、底面が平坦な箱形を呈する。断面形状や埋土の堆積状況より、土坑底面に接して桶ないし曲物等の木製容器が据えられ、木製容器と土坑壁との間に明黄褐色粘質中砂(5層)が裏込めとして投入されたと考えられる。裏込め土の堆積範囲より木製容器の外径は最大約90cmと推定される。木製容器は、土坑廃棄時に撤去されたか腐食により消失し



第 246 図 SK037～SK042 平・断面図

たと考えられ、調査時には残存していなかった。遺構の内容より、水溜めないし肥溜めとして利用されたと考えられる。にぶい黄橙色粘質中砂（4層）は、木製容器撤去後の土坑埋戻し土とされ、一定程度埋め戻された後、灰黄褐色粘質中砂等（1～3層）により徐々に自然埋没したのであろう。

遺物は、図示した以外に器種不詳の弥生土器や瓦器碗の小片数点が出土した。いずれも混入資料と考えられる。1358 は、肥前系陶器碗の口縁部。内外面に灰釉を施す。

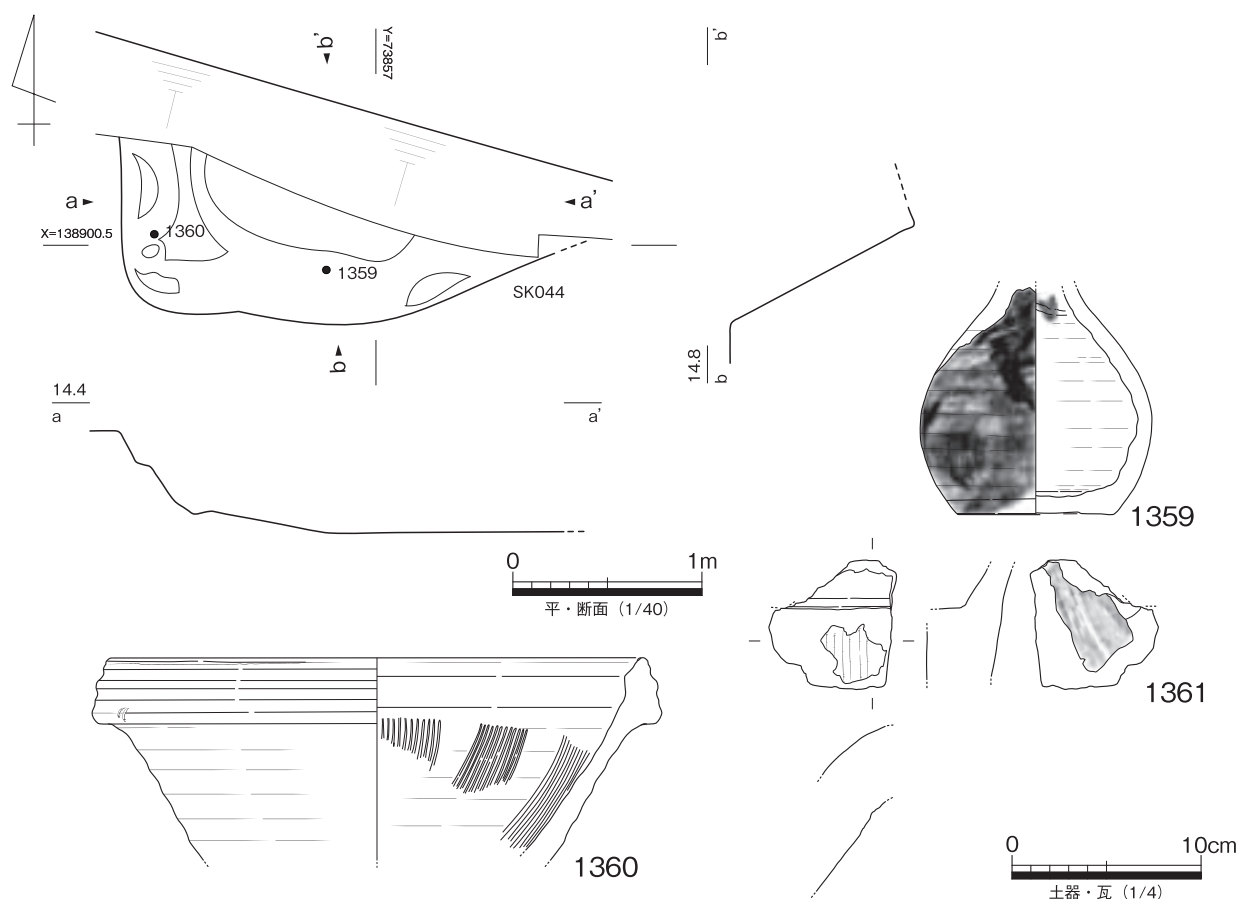
出土遺物より本遺構は、17 世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

SK037～SK042（第 246 図）

8 区中央周辺で検出した、東西に列状に配された 6 基の土坑群である。調査時には柱列の可能性が指摘されているが、各土坑に柱痕は認められず、根石等の出土はなく、0.1～0.2 m と各遺構が近接して配され、平面規模や後述するように底面がほぼ平坦なものが多い点より、柱穴ではなく土坑群の可能性を想定する。SD093 上面より掘り込まれる。東端の SK037 の東には近代埋没の溝 SD221 が南北に開削され、さらに東に数基が並んでいた可能性も考えられる。土坑群の主軸は N 88.33° W とほぼ正方位に配され、土坑群南に近接する東西溝 SD222 と SD223 と主軸方向がほぼ合致し、時期的に近接した遺構である可能性が想像される。

各土坑の平面形は、長径 0.44～0.63 m の不整円ないし楕円形状を呈する。残存深は 0.08～0.16 m、断面形は SK042 を除いて底面が平坦な概ね逆台形状を呈する。埋土は 2～3 層に細分され、レンズ状に堆積していた。

遺物は、各土坑より器種不詳の弥生土器や土師質土器の小片 2～7 点が出土した。図化した遺物はない。SD221 より先行する点と出土遺物より、中世末～近世の遺構と考えられる。丸亀市平池東遺跡（東・



第247図 SK044 平・断面・出土遺物実測図

佐藤ほか 2008) や京都市京都大学構内遺跡 (伊藤 2000) 等では、近世以降の列状に並んだ複数基の野壺が検出されており、本遺構も同様な性格を有する土坑群の可能性を想定する。

SK044 (第247図)

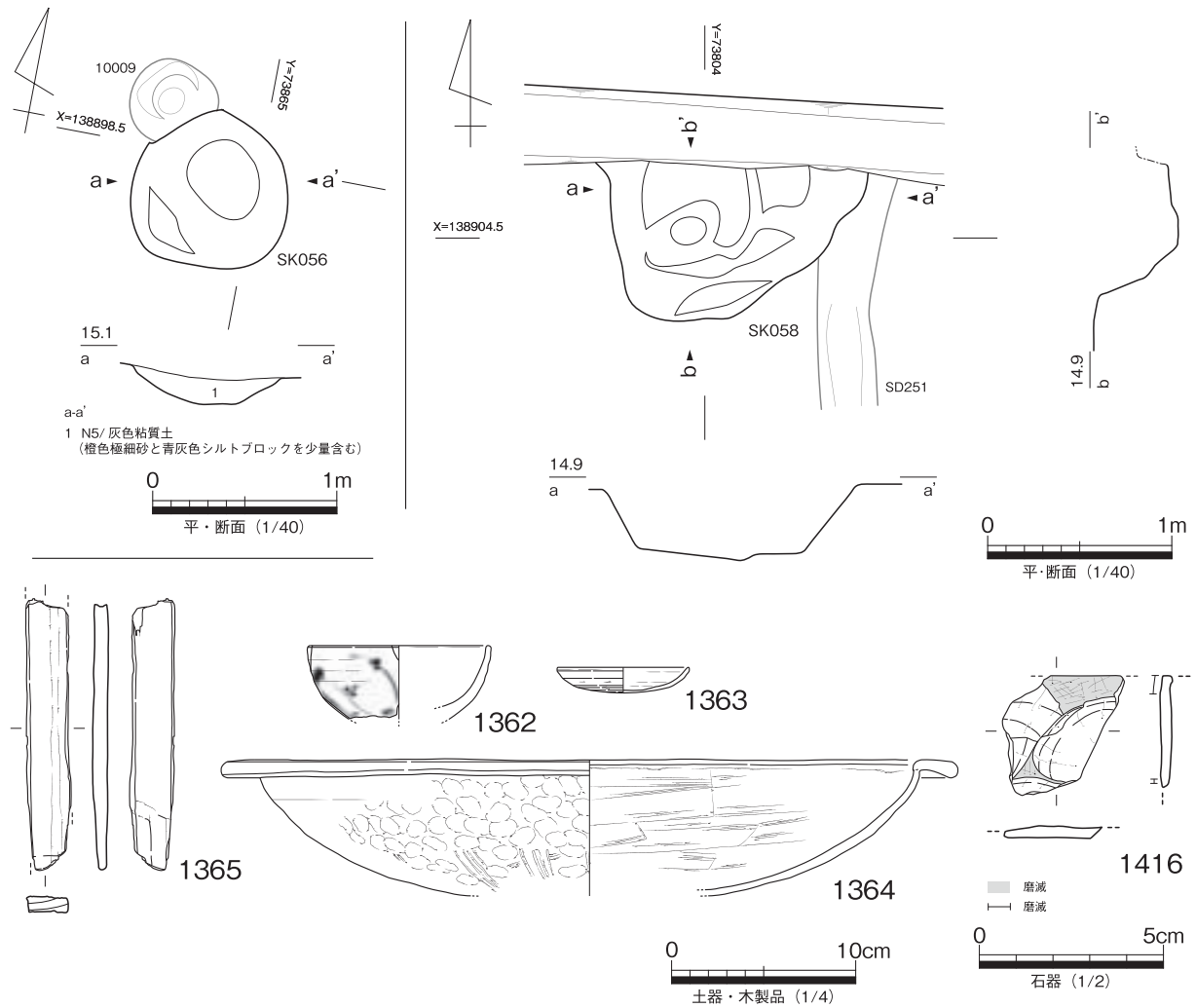
9区東端付近で検出した土坑である。北半部は調査区外へ延長し、全形は不明。調査範囲で、東西2.27m以上、南北0.87m以上、平面形は台形状を呈する。掘り方西辺と南辺は直線状を呈して直交し、おそらくは平面隅丸方形を呈するとみられる。残存深0.53mで、掘り方西辺と南東辺には、小さなテラス面が複数箇所、不規則に認められ、断面形は階段状を呈する。堆積物に関する記録はないが、上述した断面形状から、複数遺構の重複もしくは埋没後の再掘削の可能性が考えられる。

遺物は図示した以外に、器種不詳の弥生土器や須恵器、備前系焼締陶器、土師質土器足釜等の小片が10点程度出土した。**1359**は肥前系施釉陶器瓶。頸部から体部外面に鉄釉を施す。底部は低い削り出し高台で、露胎となる。17世紀前半か。**1360**は、備前焼播鉢。口縁部に焼成時の重ね焼き痕を認める。口縁部外面に2条の沈線を施す。スリメは幅約3cmで、12条/単位の原体を放射状に施す。16世紀末～17世紀前葉。**1361**は丸瓦玉縁部の小片。復元径が大きくなることから、棟用丸瓦の可能性はある。

出土遺物より本遺構は、17世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

SK056 (第248図)

10区中央南端付近で検出した土坑である。SB12と重複し、建物より後出する。平面形は、径0.83～0.87



第 248 図 SK056・SK058 平・断面・出土遺物実測図

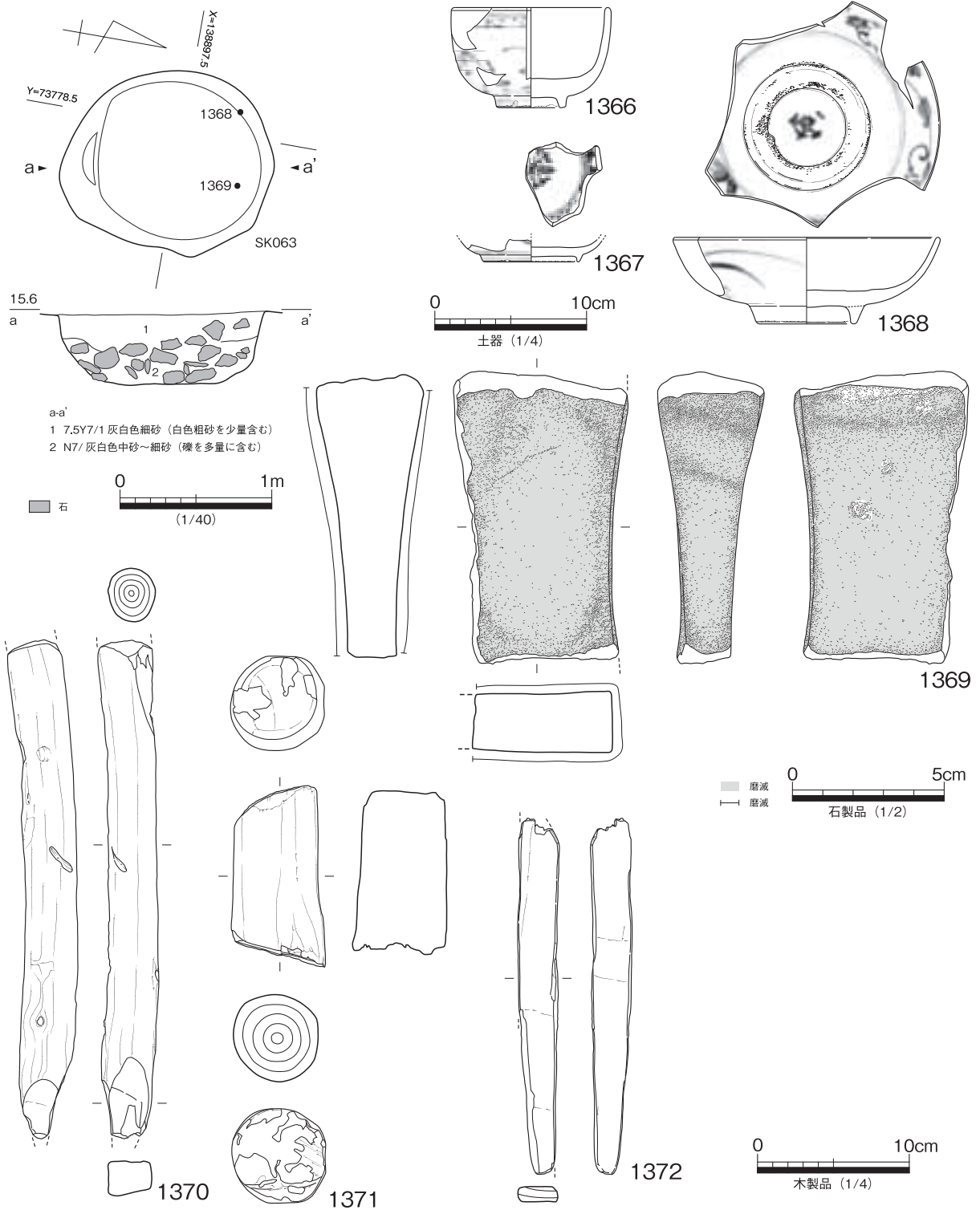
mのやや歪な円形を呈する。残存深は0.2 mで、断面形は碗底状を呈する。埋土は、灰色粘質土の単層で、ブロック土を少量ながら含むことから、人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

遺物は、器種不詳の弥生土器や土師質土器、肥前系施釉陶器、燻焼平瓦等の小片 8 点が出土した。図化した遺物はない。出土遺物より、近世以降の埋没の可能性が考えられる。

SK058 (第 248 図)

10 区中央北端で検出した土坑である。SD251 より後出する。北半部は調査区外へ延長するため、全形は不詳。調査範囲で、東西 1.46 m 以上、南北 0.89 m 以上、平面形は不整隅丸形状を呈する。残存深 0.41 m で、断面形は概ね逆台形を呈し、底面は起伏が顕著に認められる。埋土に関する記録は残されていない。平面や底面の形状等より、複数遺構の重複もしくは埋没後の再掘の可能性が想定される。

遺物は、図示した以外に、器種不詳の弥生土器や瓦質土器、瀬戸・美濃系施釉陶器碗、焼締陶器挿鉢、燻焼平瓦等の小片が 10 点程度出土した。**1362** は肥前系染付磁器碗。外面に草花文を描く。**1363** は備前焼灯明皿。**1364** は胎土中に角閃石細粒を含み、高松市御厩周辺で焼成された土師質土器焙烙である。**1365** は、長さ 15cm 以上、幅 2.2cm の用途不明の板材である。樹種はヒノキ (第 4 章第 3 節参照)。**1416** は、おそらくは方形板状を呈する流紋岩製砥石の小片である。

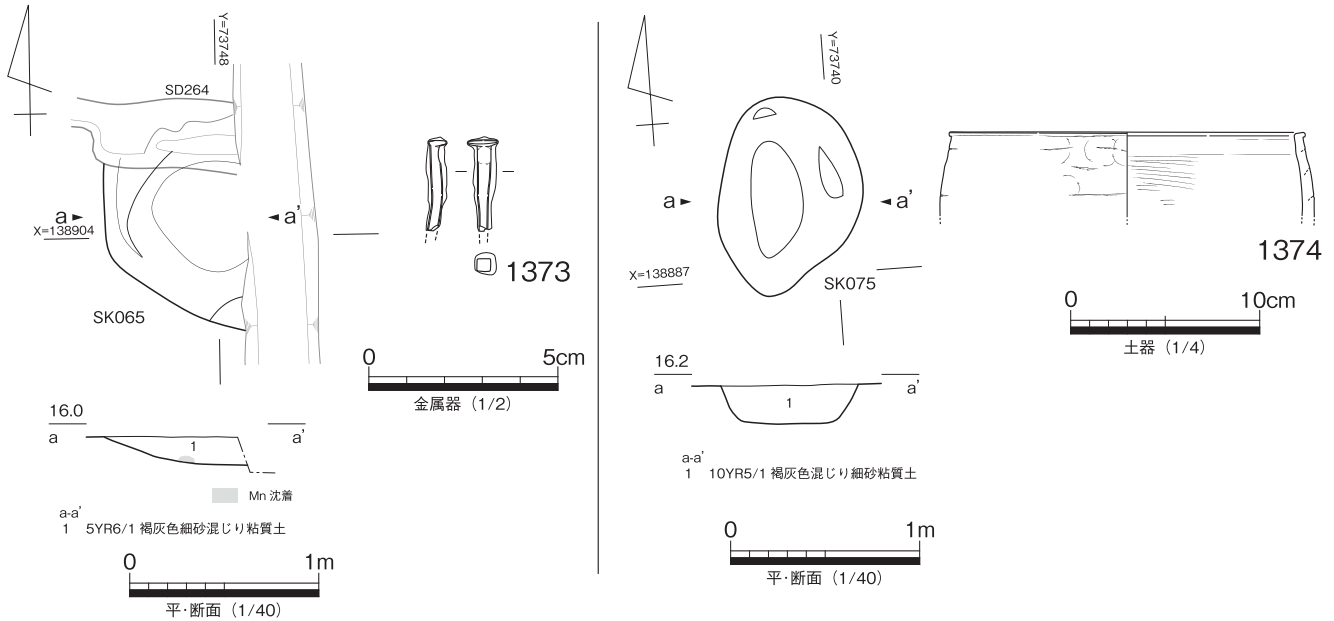


第249図 SK063 平・断面・出土遺物実測図

出土遺物にはやや時期幅が認められるものの、概ね18世紀後葉～19世紀初頭の埋没の可能性を想定する。

SK063 (第249図)

11区南東隅付近で検出した集石土坑である。南北1.37m、東西1.21m、平面形はやや南北に長い略



第 250 図 SK065・SK075 平・断面・出土遺物実測図

円形状を呈する。残存深 0.48 m、断面形は底面が平坦な逆台形状を呈する。埋土は 2 層に細分され、灰白色細～中砂で充填されていた。下層を中心に、長軸 6～21cm 前後、厚さ 2～10cm 前後の深成岩を中心とした垂角～垂円礫が、遺物と共に多量に出土した。整地や耕作等に伴い出土した礫を、一括して投棄したものと考えられる。

遺物は図示した以外に、燻し焼の平瓦や丸瓦の小片 10 点程度が出土した。**1366** は、肥前系陶胎染付の腰張形碗である。外面には粗略に松や草花文が描かれる。18 世紀後半～19 世紀前葉。**1367・1368** は、肥前系染付磁器皿。**1368** は、内面見込みを蛇の目釉割し、アルミナ砂を塗布する。中央には崩れた五弁花を描く。18 世紀代か。**1369** は、細粒砂岩製の方柱状の砥石。側面 3 面を使用する。側面の 1 面は破損し、破損後に再利用を試みたが、さほど使用することなく廃棄している。

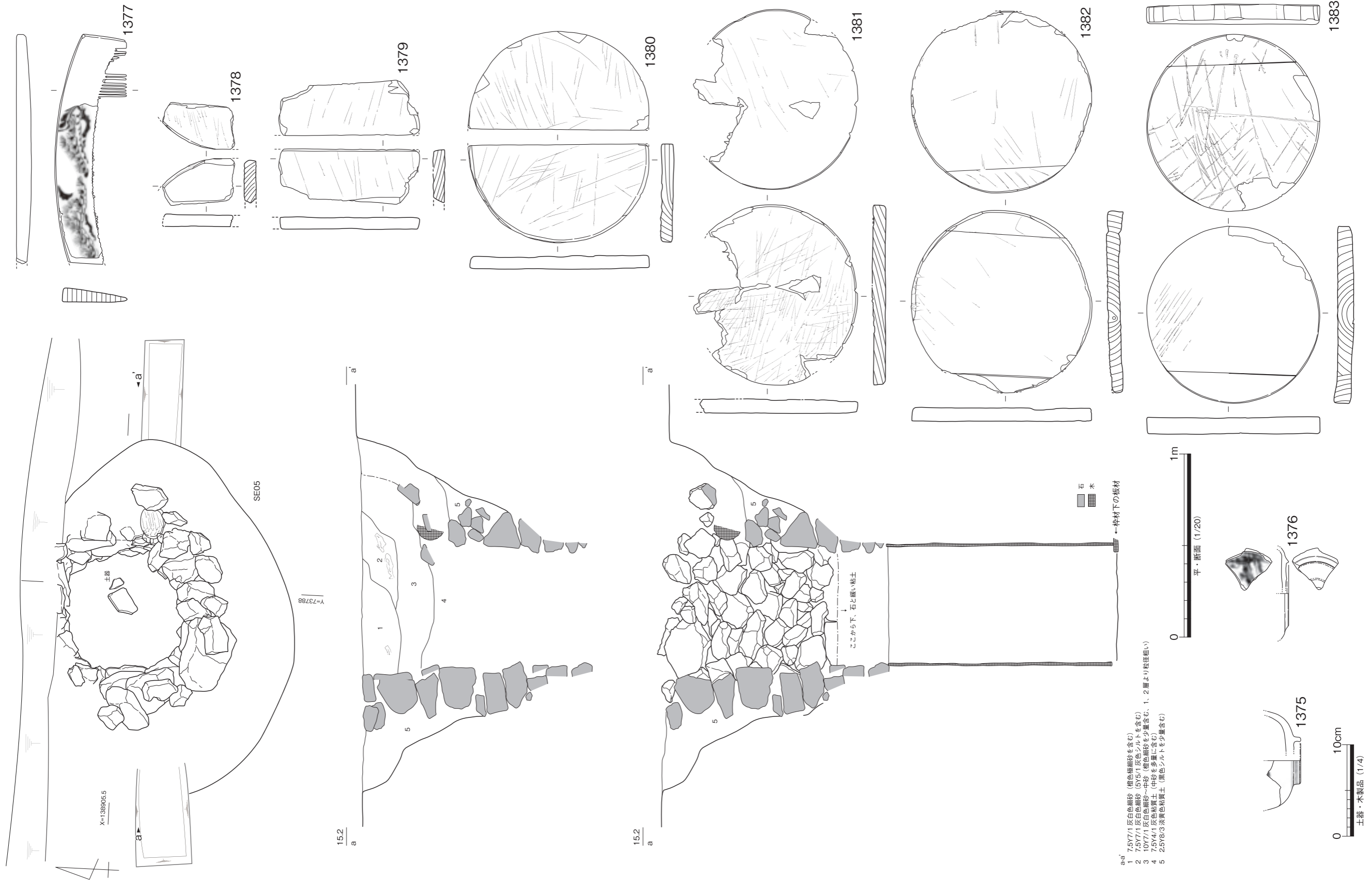
1370 は、径約 3 cm の芯持材を用いた木杭。全体的に腐食や虫食いが顕著で、工具痕は明瞭ではない。下端を 3 方向から削り、横断面は矩形を呈する。樹種はスダジイ(第 4 章第 3 節参照、以下同)。**1371** は、長さ約 12 cm、径約 6 cm の芯持丸木の両端を斜めに切断した加工木で、端材であろう。両端部は、腐食や虫食いが顕著で、加工痕が不明瞭である。マツ属複雑管束亜属。**1372** は、厚さ約 1 cm の板目材を用いた板材だが、上下端を折損し全形は不明。全体に腐食が顕著で、加工痕は不明瞭である。ヒノキ。

出土遺物より、最終的な埋没は 18 世紀後半～19 世紀前葉を上限とする時期に位置付けられる。

SK065 (第 250 図)

13 区北東隅部で検出した土坑で、東半部は調査区外へ延長し、北半部は SD264 に切られ、より北側で延長は確認できなかった。また、SD272 と重複し、切り合い関係より後出する。平面形は、東西 0.74 m 以上、南北 0.9 m 以上の隅丸方形ないし不整楕円形状を呈するとみられる。平面図上では、掘り方西側に、最大 13 cm 程のテラス面が存在するが、同位置の断面図にはそうしたテラス面の所在は確認できない。残存深は 0.15 m 以上を測り、東西断面形は皿状を呈する。埋土は、褐灰色粘質土の単層で、底面の一部にマンガンの沈着が認められた。

遺物は図化した以外に、器種不詳の土師質土器や須恵器の小片 10 点前後と肥前系染付磁器碗小片 1

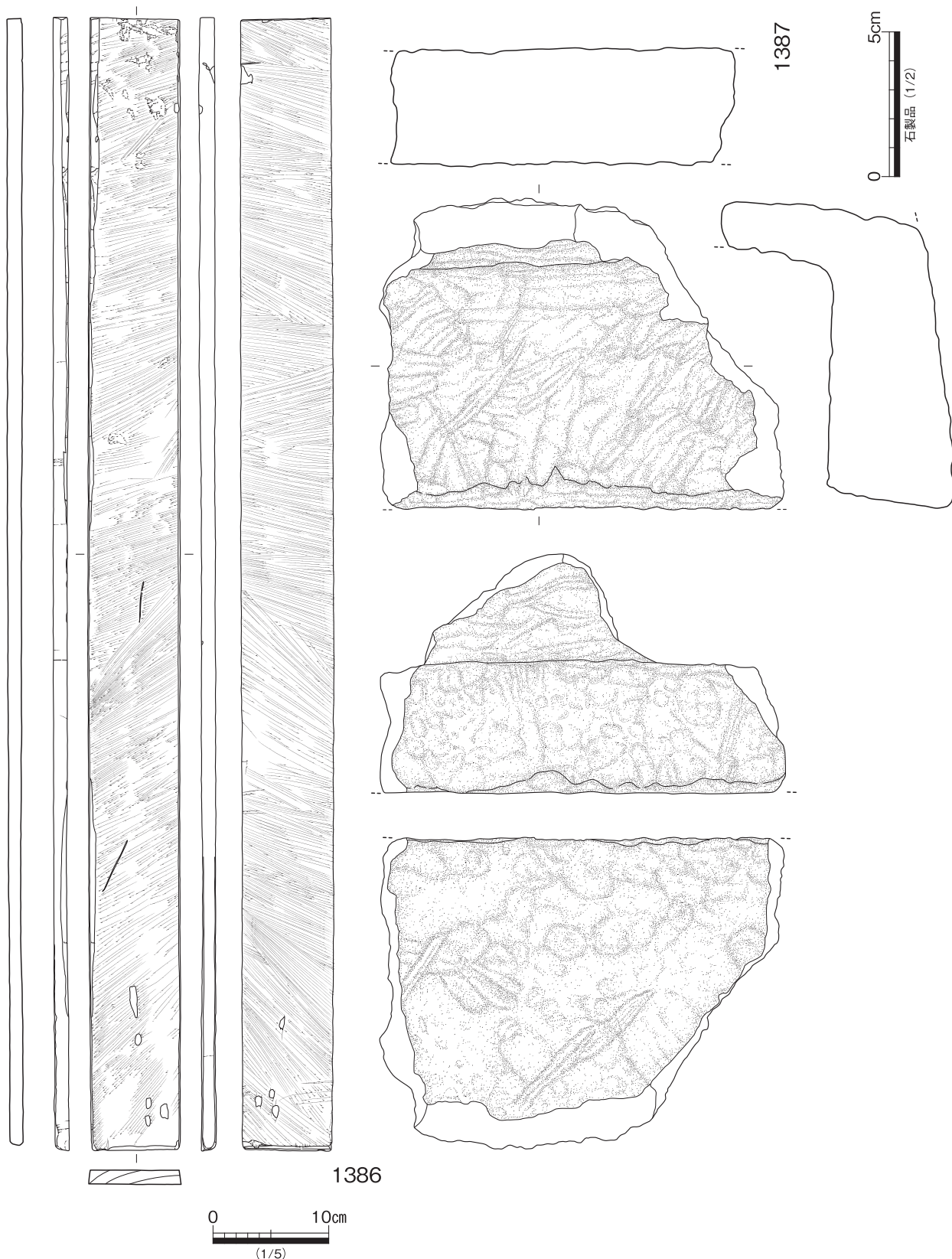


第251図 SE05 平・断・立面・出土遺物実測図1



第 252 図 SE05 出土遺物実測図 2

点が出土した。1373 は軸部 3 ～ 4 mm 角の角釘である。頭部は折り曲げている。近世の資料は、SD264 より混入の可能性も想定されるものの、本遺構出土資料として評価し、18 世紀代を中心とした時期に



第 253 図 SE05 出土遺物実測図 3

位置付けられると判断した。

SK075 (第250図)

13区東南端付近で検出した土坑である。長軸1.02m、短軸0.74m、平面形は南北に長いやや歪な楕円形状を呈する。残存深0.20mで、横断面形は底面が平坦な逆台形状を呈する。埋土は、褐灰色粘質土の単層であった。掘り方の北と北東壁に、小さなテラス面が存在するが、埋土は単層であるため、埋没後の再掘の可能性は低いと思われる。

遺物は図示した以外に、器種不詳の土器小片2点が出土した。**1374**は瓦質土器羽釜の口縁部の小片として図示した。やや内傾気味に開き、端部は小さく外方へ折り返す。

出土遺物より、本遺構は19世紀前葉以降に位置付けられると考える。

井戸

SE05 (第251～253図)

10区北西端付近で検出した井戸である。遺構北端部は調査区外へ延長するが、井戸枳部については全形を調査した。調査範囲で、東西1.88m以上、南北0.82m以上、掘り方平面形はやや歪な円形を呈するとみられる。残存深は後述する井戸枳の状況より、2.5m程度とみられる。湧水層との関係は不詳である。井戸枳は上位に石積み、下位に木製の樽が転用されていた。石積は、井戸廃絶後の埋戻しに際して、一部崩されていたが、高さ約1.2mが遺存していた。井戸枳内からは、石積みに使用されていたとみられる礫が出土しており、本来はさらに高く積み上げられていた可能性が高い。石積みは、長さ10～25cm、幅10～30cm、厚さ8～20cmの深成岩の垂角礫を主体に、上から見て右回りの螺旋状に木口積みを主体に積まれていた。下端部の内径約60cm、上端部の内径は推定で約80cmを測り、上開きに積まれていた。調査記録から判断する限り、裏込めに石材がほとんど使用されていないのは、こうした積み方によるのであろう。下部の井戸枳は、内傾約62cmの樽の底板を抜いたものを転用しており、上述した石積みは樽上面より組まれている。樽は、長さ約122cm、幅10～18cm、厚さ1.5～1.7cmの、横断面台形の板目材約16～18枚（正確な枚数は記録がなく不明）を組んで作られていた。桶下端には、厚さ数cmの板材が、桶の沈下を抑えるため敷かれていたが、その枚数等の詳細は不明である。

埋土は、井戸内埋土4層と石積み裏込め1層の5層のみ記録され、井戸内埋土の4層はいずれも井戸廃絶後の埋戻し土と考えられる。

遺物は、図示した以外に、弥生土器甕、土師質土器足釜、肥前系施釉陶器刷毛目鉢、同染付碗、燻焼丸瓦等の小片10点程度が出土した。遺物はすべて、井戸廃絶後の埋戻し土及び井戸枳内埋土より出土しており、裏込め土からは遺物は出土していない。**1375**は肥前系陶胎染付碗である。体部の文様は不明。**1376**は肥前系染付磁器皿。蛇の目凹形高台で、内面に山水図を描く。

1377は、イスノキを用いた横櫛である。片面に赤地に黒漆で松を描く。漆膜の分析については後掲（第4章第5節）した。残念ながら、下地については明らかにできなかったが、赤漆は2層に塗り重ねられ、上層には透明度の高い朱が混和されている等、土産物等として量産された廉価品ではない可能性が示された点は、本遺跡の居住者の性格を考える上で興味深い。**1378**～**1383**は、ヒノキ科アスナロ属（**1382**）とマツ属複雑管束亜属（**1382**以外）の板目材を用いた径20cm前後の円盤状木製品である。桶底板の可能性を想定するが、底板とすれば径に対して厚さ1.2～1.4cmとやや厚く、側板が1点も出土していない等、やや疑問が残る。小片のため不明な**1378**を除いて、一枚板の**1381**・**1382**と、半切した2枚を組み合わせる**1379**・**1380**の2種類がある。いずれも多寡はあるものの、表裏面に刃痕を認

内間遺跡 (香川県教育委員会 2024 年)

める。1384～1386は杵転用の樽材である。現場において選別した3点を図化した。いずれも表裏面に、大鋸による切断痕が明瞭に残る。1387は角礫凝灰岩製の断面し字状を呈する延石の小片である。全体にマメツが顕著だが、裏面を中心に加工痕を認める。

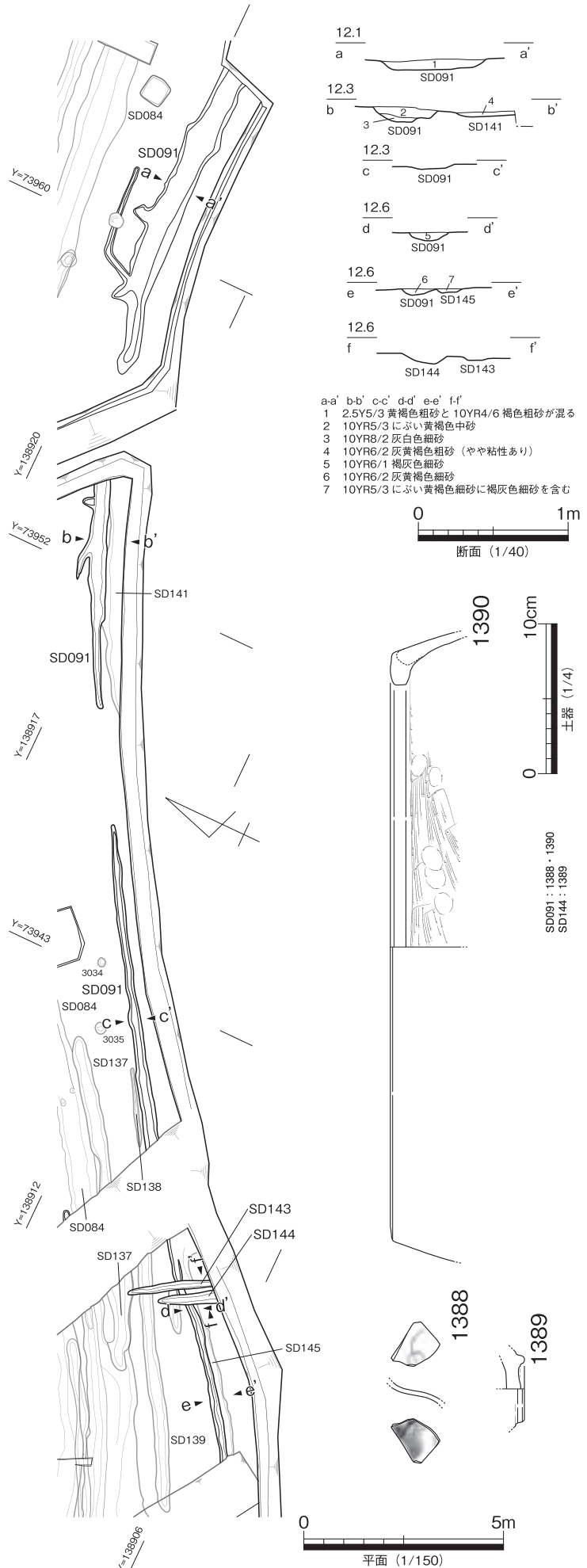
出土遺物より、井戸の埋没は19世紀前半代を遡ることはないが、構築時期については井戸掘り方出土の資料が皆無のため、明確にはできなかった。

溝

SD091 (第254図)

2区南西隅から3区南端付近で検出した東西溝である。1～3区南側の丘陵縁に沿って、緩やかにやや北に弧を描いて配される。断続的に検出されたが、流路方向や規模等より、一連の溝として報告する。東端は調査区外へ延長し、西端は調査区内で途切れる。延長約35.6mを調査した。重複関係より、SD141とSD145より後出し、SD143・SD144より先行する。溝は、検出面幅0.4～0.6m前後、残存深0.06～0.20m、断面形は浅い皿状ないし逆台形状を呈する。埋土は2層に細分され、褐色系細～粗砂がレンズ状に堆積していた。溝底面の標高は、西端付近で12.34m前後、東端付近で12.0m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。

遺物は、図示した以外に、器種不詳の須恵器や土師質土器、平瓦等の小片が5点出土した。1388は、肥前系染付磁器鉢の体部小片。口縁部は外反し、内面には松葉等が、外面には線描き文様が描かれる。1390は、土師質土器



第254図 SD091・SD143・SD144 平・断面・出土遺物実測図

火鉢の口縁部片である。口縁部は断面矩形状に内側に肥厚する。胎土中に角閃石や黒雲母細粒を含み、高松市御厩周辺で製作された可能性が高い。

出土遺物より本溝は、19世紀前葉以降に位置付けられると考える。

SD143・SD144（第254図）

3区中央南端付近で検出した南北溝である。概ね流路方向N 31.96°Wに配される。両溝とも南端は調査区外へ延長し、北端は調査区内で途切れる。SD143は延長2.08m、SD144は同1.42mを調査した。重複関係より、SD091とSD142、SD145より後出する。検出面幅0.2m前後、SD143の残存深0.08m前後、SD144は同0.06m前後で、断面形は浅い皿状ないし逆台形状を呈する。埋土に関する記録はない。

遺物は図示した以外に、SD143より器種不詳の土器小片1点が出土した。**1389**は、SD144出土の肥前系陶器碗の底部片で、内面に鉄釉を施す。外面高台周辺は露胎で、高台内は兜巾となる。

出土遺物は混入の可能性が高く、上述したようにSD091より後出することから、本溝は19世紀前半以降に位置付けられると考える。

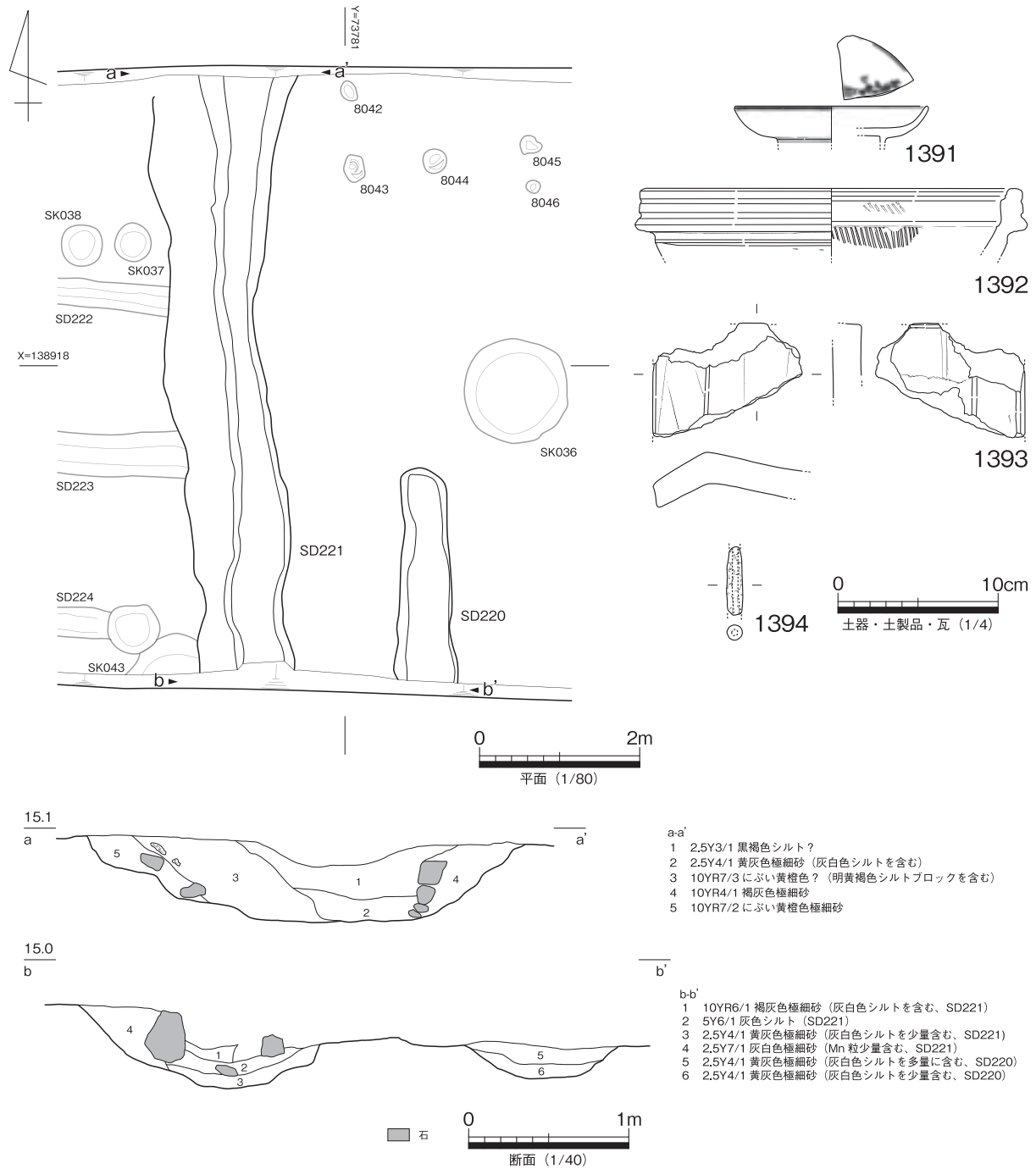
SD220・SD221（第255図）

SD221は、8区中央部で検出した南北溝である。床土層や攪乱土をベースとし（第27図）、後述する改修溝の石積護岸の一部にコンクリートが使用されている。SD220は、SD221と同一面より掘り込まれ、後述する出土遺物の点からも、SD221と同時期に機能していた可能性を想定する。1960年代撮影の空中写真に、SD221の可能性のある溝が認められ、埋没は昭和期の圃場整備時と考えられる。SK043やSD222、SD223と重複し、そのいずれよりも後出する。南北両端は調査区外へ延長し、南側に位置する11区では本溝の南延伸部を攪乱として捉えている。なお本溝は、町田新池より取水し、丘陵裾を東へ流下する灌漑水路の北へ分岐した支水路で、10区と11区の間を調査時にも後継水路が機能していた。

SD221は、検出面幅0.97～1.56m、流路方向N 1.66°Wとほぼ正方位に配される。残存深0.48m、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は調査区南壁と北壁で記録され、北壁の記録をもとに以下記載する。北壁では、溝開削時の石積護岸の裏込土（5層）、溝改修時の埋戻し土（3層）、改修溝の石積護岸の裏込土（4層）、改修溝機能時の堆積土（2層）、改修溝廃絶時の埋戻し土（1層）の5層に分層する。開削時の溝は、改修溝より流路方向がやや西に振っており、0.12m程度浅かった可能性が考えられる。なお南壁では、開削時の溝の堆積物は改修溝により攪乱され残存していない。

SD220は、検出面幅0.65m前後、残存深0.23mで、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は2層に細分され、黄灰色極細砂が水平堆積していた。護岸施設はなく、改修の痕跡も確認できなかった。

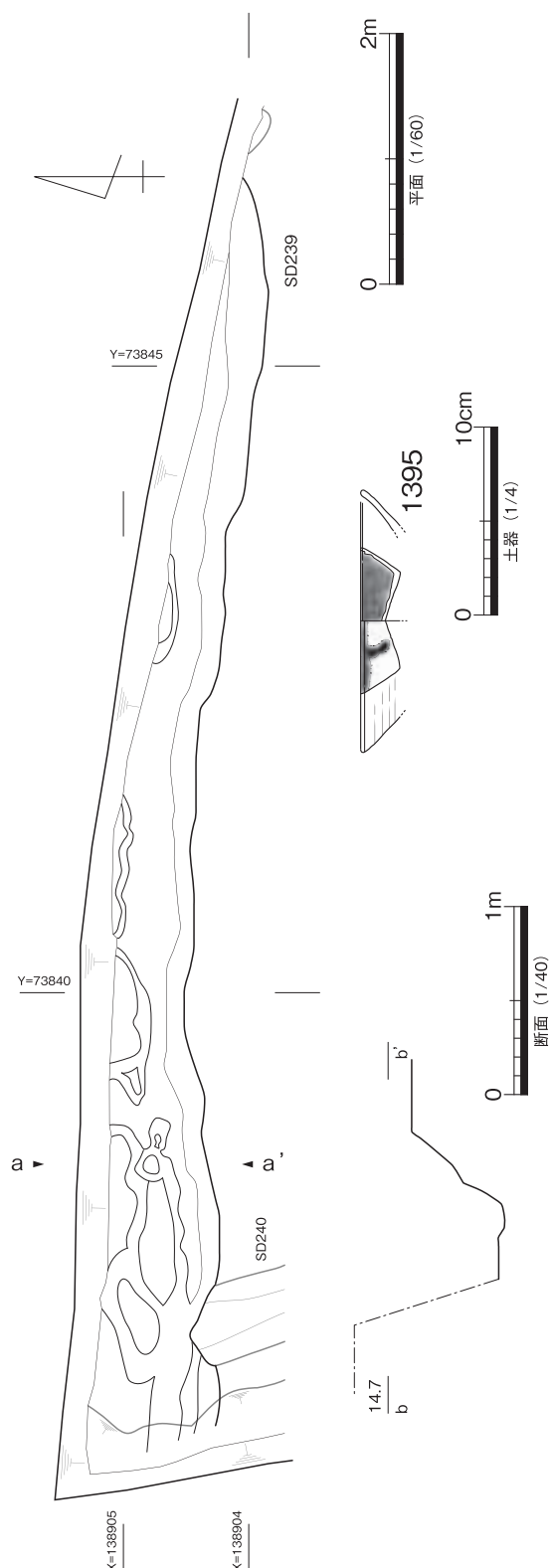
遺物は、SD221からは図示した以外に、器種不詳の土器や須恵器、土師質土器足釜、瀬戸・美濃系施釉陶器、肥前系染付磁器碗、陶胎染付碗、備前焼徳利・水屋甕・灯明皿、燻し焼の丸瓦等の小片40～50点が出土した。SD220からは、器種不詳の弥生土器小片6点とガラス製おはじき1点が出土した。図示した遺物はすべて、SD221出土資料である。**1391**は染付磁器皿。見込みに草花文を描く。呉須にコバルトを使用する。**1392**は、堺・明石系の焼締陶器插鉢。口径23cm程度の小型品で、12条以上/単位のスリメを密に施す。**1393**は棧瓦の小片。図左面側にキラコが使用される。**1394**は管状土錘の破片。土師質で、焼成はややあまい。



第255図 SD220・SD221 平・断面・出土遺物実測図

SD239 (第256図)

9区北西隅部で検出した東西溝である。北岸は調査区外にあり、溝幅は不明、東西両端は調査区外へ延長する。東側では、流路方向が酷似する6区SD192が一連の溝となる可能性を考えたが、出土遺物に明確な時期差があり、別遺構と判断した。また西側では、11区中央北端で検出したSD257が一連の溝となる可能性を考えたが、同様にSD257に近世資料が含まれないことから、別の遺構と判断した。西端付近で、後述するSD240が南側より合流する。流路方向N 89.47° Eとほぼ正方位に配される。検出面幅0.87m以上、残存深0.47m前後、断面形は概ね逆台形状を呈するとみられる。なお、溝底面には顕著な起伏が認められ、複数回の改修の痕跡か、水流による溝底の下刻の可能性が考えられる。埋土



第256図 SD239平・断面・出土遺物実測図

る。SD272やSD280より後出し、SP13331等の多くの柱穴が上面より穿たれる。東端は調査区外へ延長し、西端は調査区内で途切れる。東西長約50mを調査した。溝西端と東端を結んだ流路方向はN 86.66° Wで、やや蛇行しつつ緩やかに北に弧を描いて配される。

に関する記録は残されていない。

遺物は図示した以外に、器種不詳の土師質土器や肥前系染付磁器、同施釉陶器碗等の小片5点程度が出土した。1395は、肥前系施釉陶器の銅緑釉皿である。内面及び外面口縁部に銅緑釉をかけ、外面口縁部以下には透明釉を施す。出土遺物より本溝は、18世紀代を中心とした時期に位置付けられ、後述するSD240の埋没時期と矛盾しない。

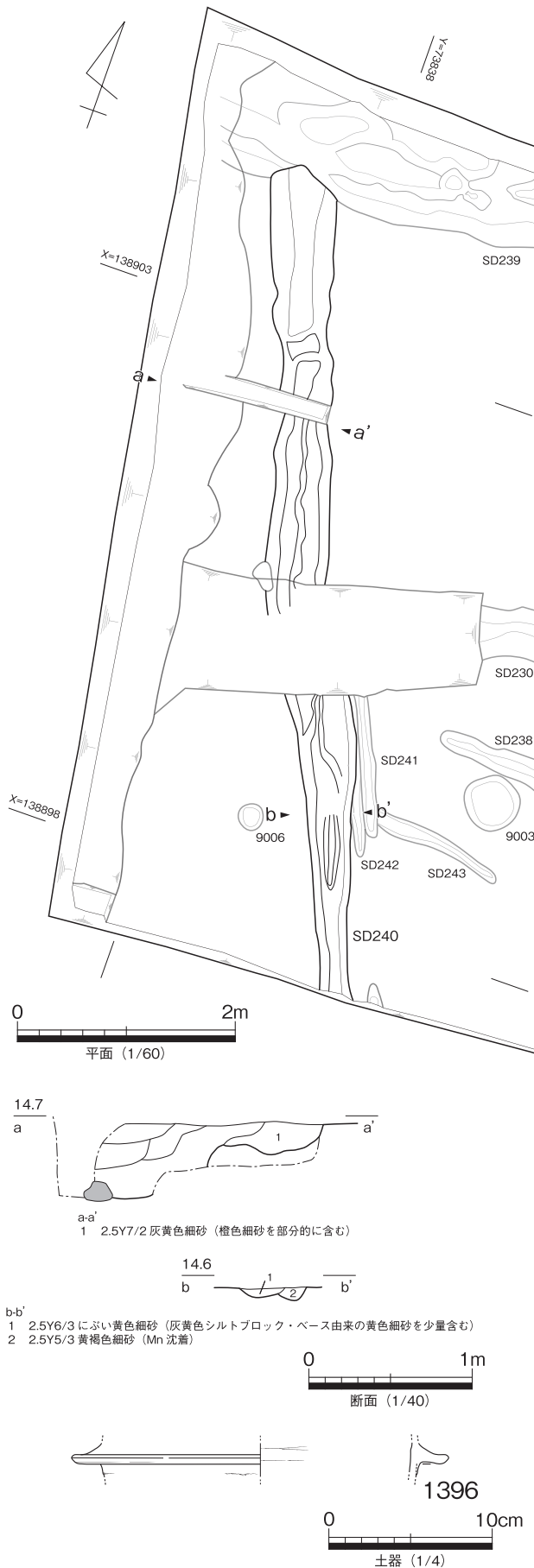
SD240 (第257図)

9区西端部で検出した南北溝である。南端は調査区外へ延長し、北端は上述したSD239に合流する。南北長約7.6mを調査した。重複関係よりSD242より後出する。流路方向N 21.67° Wに配され、SD240とは斜交する。検出面幅0.27～0.58m、残存深0.08～0.20、断面形は皿状ないし椀底状を呈する。埋土は、1ないし2層に細分され、黄色系細砂がレンズ状に堆積していた。溝底面の標高は、南端付近で14.45m前後、北端付近で14.30m前後をそれぞれ測り、高低差から北のSD239へ流下していた可能性が考えられる。なお、本溝と一部重複して攪乱溝が南北走しており、流路方向や出土遺物等より、近代以降に開削された本溝の後継溝の可能性が考えられる。

遺物は図示した以外に、器種不詳の弥生土器や須恵器の小片7点程度が出土した。1396は、土師質土器羽釜の鏝部の小片である。胎土中に角閃石粒を含み、高松市御厩周辺からの搬入品と考えられる。出土遺物より本溝は、18世紀代を中心とした時期に位置付けられ、上述したようにSD239と同時期に機能していたものとする。

SD271等 (第258図)

SD271は、13区北端付近で検出した東西溝である。

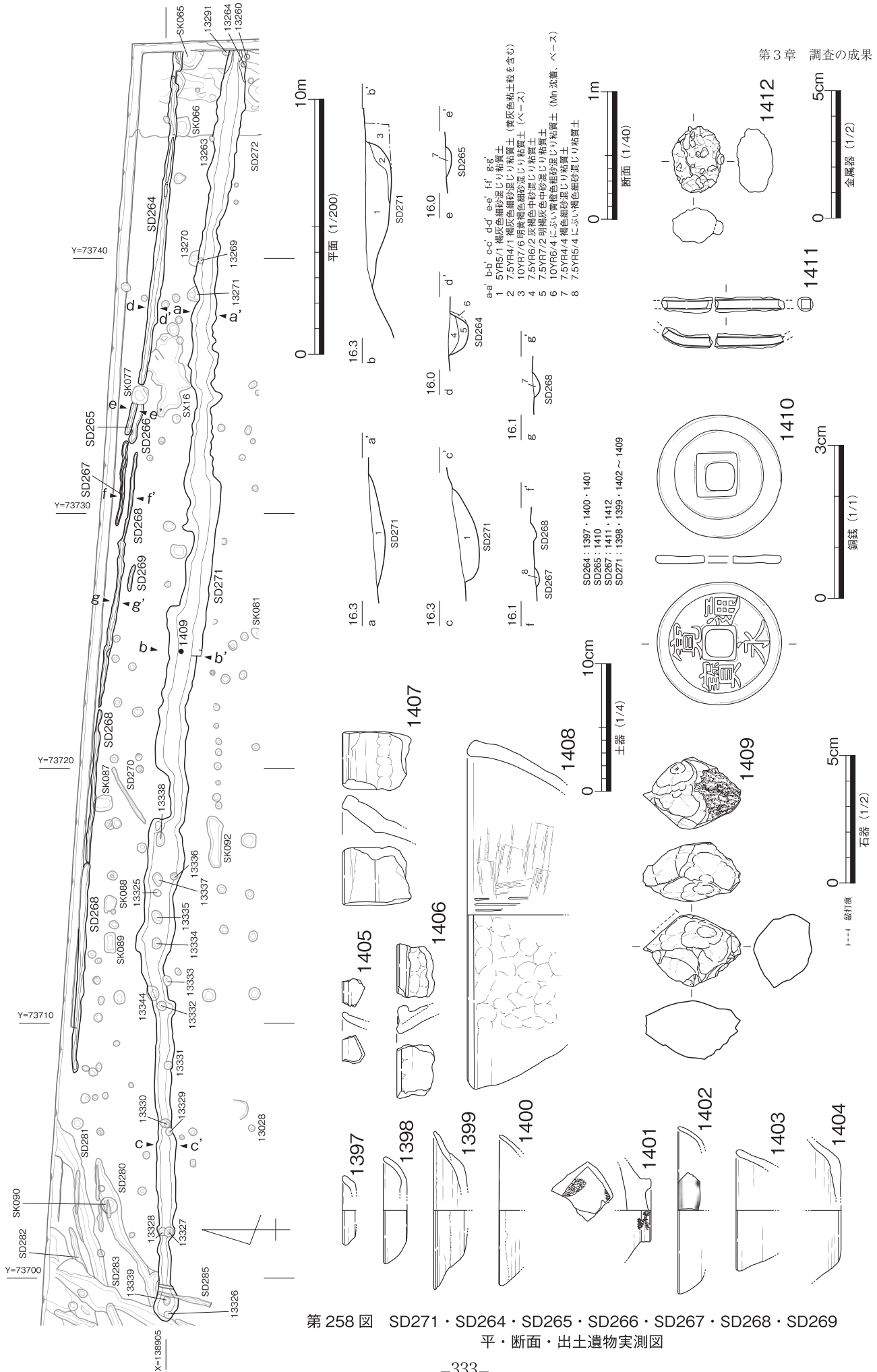


第 257 図 SD240 平・断面・出土遺物実測図

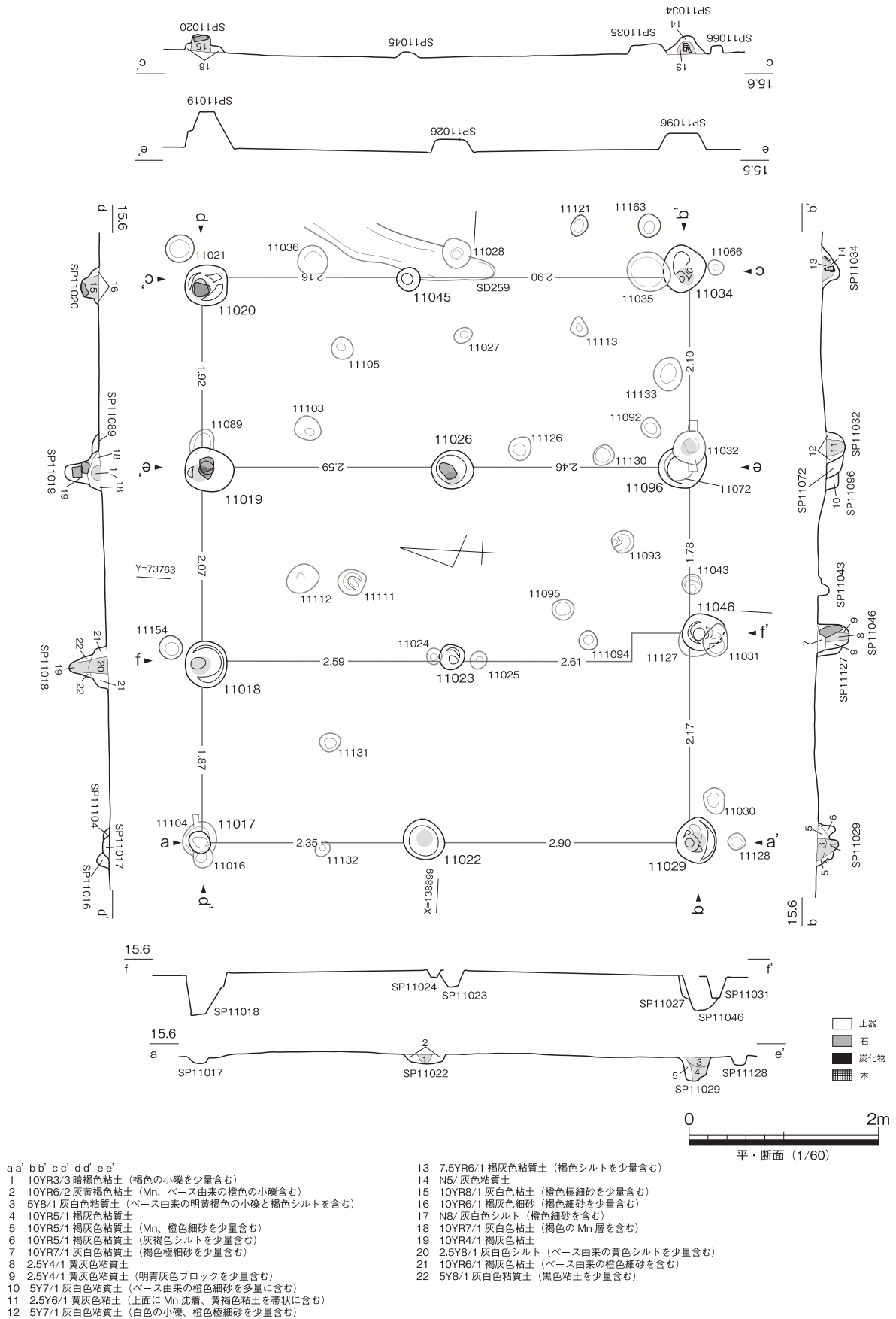
溝は、昭和期の圃場整備時に造成土（第 39 図 2 層）により埋められた、調査区北側の旧耕地の南縁に沿って開削されており、上面には圃場以前の旧耕土に伴う床土層（同図 3 層）が部分的に堆積する。こうした位置関係より、旧耕地界の区画溝の可能性が考えられる。検出面幅 0.4 ~ 1.1 m、残存深 0.12 ~ 0.25 m、断面形は逆台形状ないし皿状を呈する。埋土は 1 ないし 2 層に細分され、褐灰色粘質土がレンズ状に堆積していた。溝底面の標高は、西端付近で 16.0 m 前後、東端付近で 15.8 m 前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が考えられ、おそらくは耕地の排水路として機能していたと考えられる。

SD264 ~ SD268 は、SD271 の北側で検出された鋤溝群である。調査区東端で、SK065 を切る。本溝群も、圃場造成土下の旧耕作土下面に掘り込まれており、上述した SD271 と検出面を同じくする可能性がある。流路方向は N 83.5° W 前後と N 86.4° W 前後のものがあり、少なくとも 2 時期のものが併存している可能性が高い。上述した SD271 の流路方向とも近似する。SD264 と SD268 は検出面幅 0.26 m 前後と、他の溝よりやや幅が広く、SD264 は残存深 0.15 m を測る。SD264 以外の溝は、同幅 0.12 ~ 0.15 m、残存深 0.04 ~ 0.06 m で、断面形は浅い皿状を呈する。埋土も、SD264 以外は褐色系粘質土の単層だが、SD264 は 2 層に細分され、レンズ状に堆積していた。

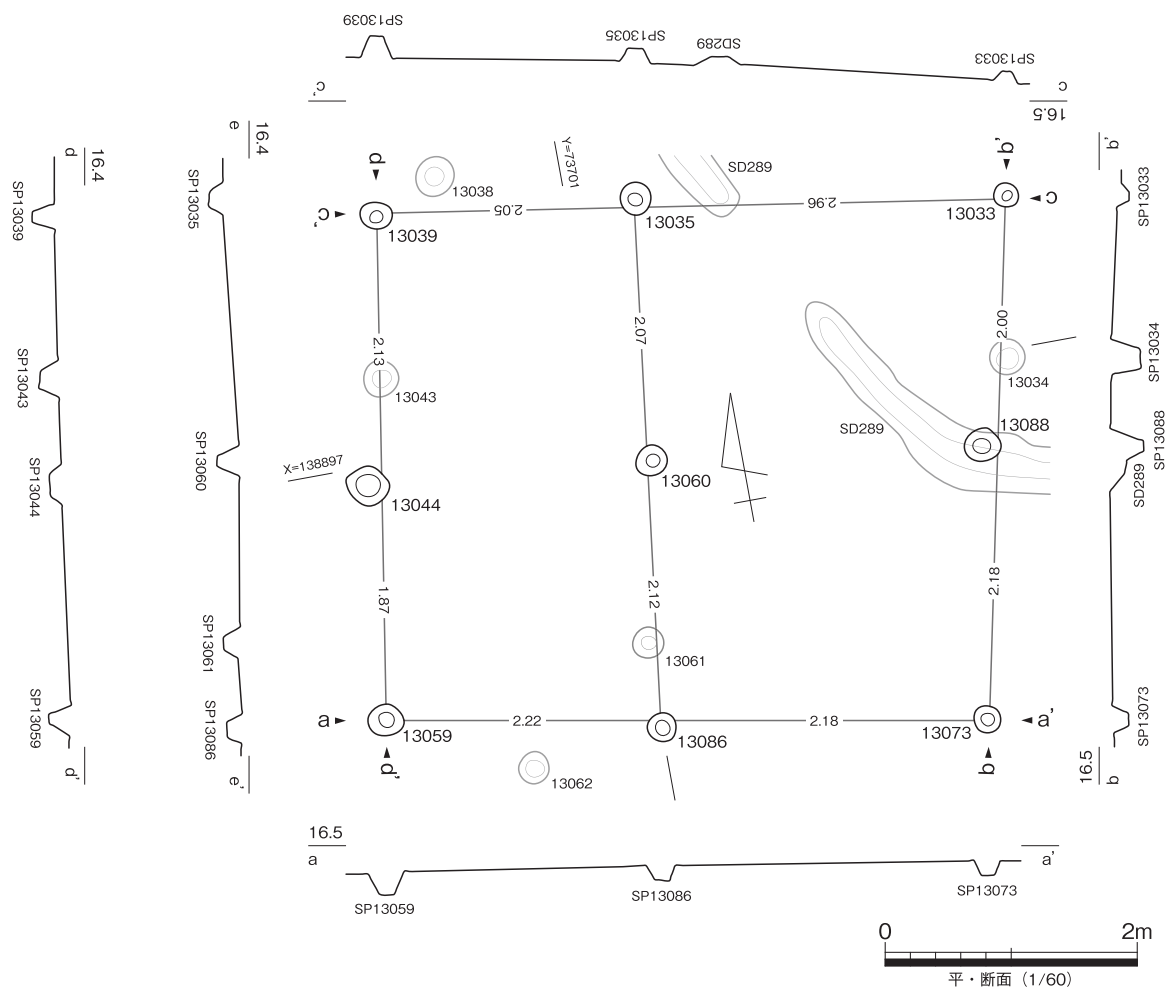
遺物は、図示した以外に、SD271 より器種不詳の弥生土器や須恵器、黑色土器碗、土師器カマド、土師質土器皿・杯・把手付鍋・播鉢、瓦器碗、肥前系染付碗等の小片が若干量、SD264 より器種不詳の須恵器、土師質土器皿・杯・足釜等の小片 30 点程度と、拳大の焼土塊 1 点、SD265 より器種不詳の土器や須恵器の小片 3 点、SD267 より器種不詳の土器小片 2 点がそれぞれ出土した。1397 は土師質土器皿。



第258図 SD271・SD264・SD265・SD266・SD267・SD268・SD269
平・断面・出土遺物実測図



第 259 図 SB13 平・断面図



第260図 SB19平・断面図

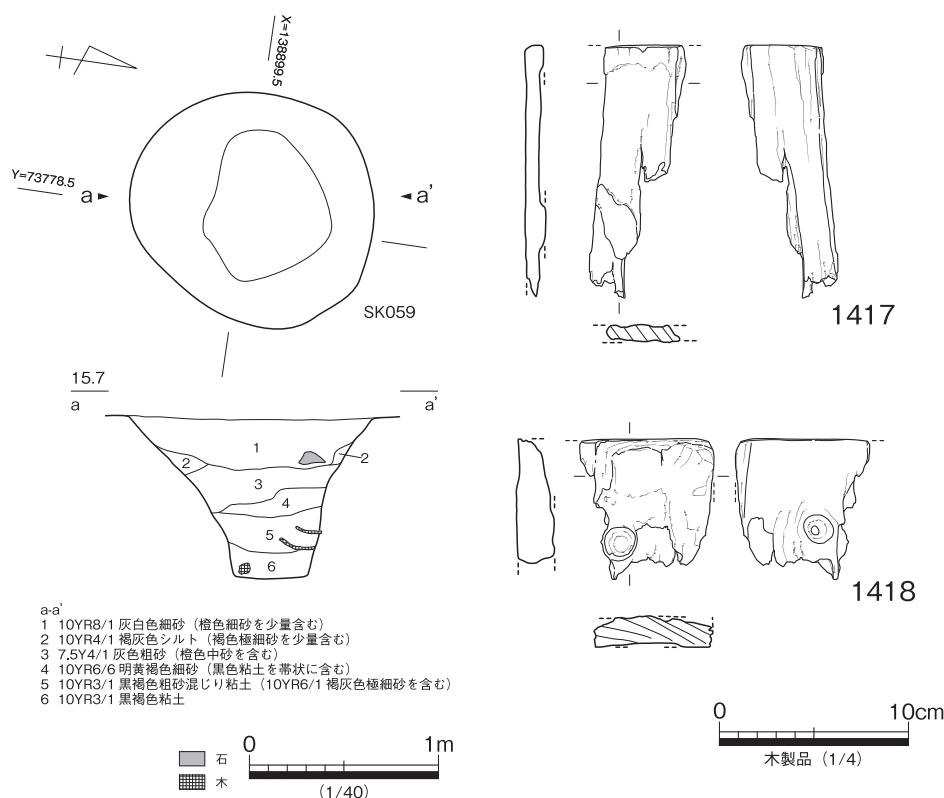
底部は回転ヘラ切り。**1398**も同皿。底部はややマメツが顕著だが、ヘラ切りとみられる。**1399**も同皿で、1399に内湾気味に開く口縁部を貼付する。外面口縁部には沈線状の段を施す。**1400**は肥前系陶器皿で、いわゆる銅緑釉皿である。**1401**も同灰釉皿の底部片。内面見込みに2ヶ所以上の砂目を置く。高台は畳付けを残して施釉され、高台内はいわゆる兜巾である。**1402**は同染付磁器皿の口縁部片。**1403**は土師質土器杯の口縁部片。**1404**も同杯で、底部は回転ヘラ切り後ナデを施す。**1405**は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、上田分類D類か。**1406**は土師質土器足釜の口縁部片。**1407**は同鍋の口縁部小片。外面には使用時に煤が付着する。**1408**は同播鉢。内面はハケ調整後に3条以上/単位のスリメを施す。内面に一部煤が付着する。**1409**はサヌカイト片。稜角に弱い敲打痕が残され、火打石と思われる。**1410**はほぼ完形で出土した寛永通寶である。**1411**は3～4mm角の鉄釘である。中位で2片に折損する。**1412**は鍛冶滓の小片。**1397**等出土資料の一部に中世の混入資料が見られるものの、肥前系陶磁器類や土師質土器杯等より、17世紀～18世紀前葉を中心とした時期に位置付けられると考える。

7. 時期不明の遺構

掘立柱建物

SB13 (第259図)

11区西部付近で検出した掘立柱建物である。調査時に建物を復元した。SD259より後出する。梁間



第 261 図 SK059 平・断面・出土遺物実測図

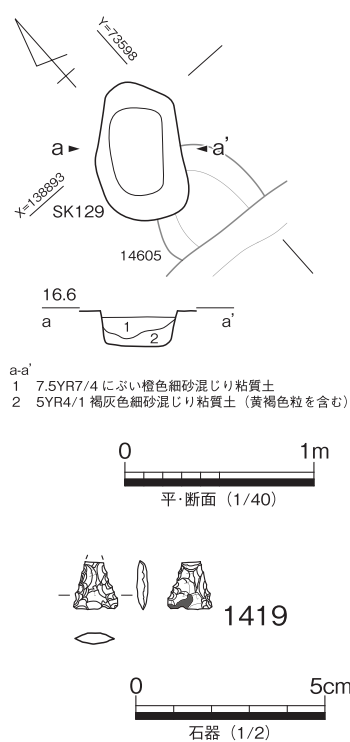
2 間 (5.16 m)、桁行 3 間 (5.96 m)、床面積約 30.75㎡、主軸方向 N 86.34° E に配された東西棟の総柱建物を復元する。桁行の柱間間隔は 1.78 ~ 2.17 m で、梁間のそれよりやや狭く、また梁間を含め柱間間隔は揃っていない。柱穴は、長径 0.23 ~ 0.50 m の略円ないし不整楕円形等を呈し、残存深 0.06 ~ 0.40 m、底面の標高 15.00 ~ 15.40 m と深浅が顕著で、断面形は逆台形ないし皿状等を呈する。SP11020 等で、径 0.15 ~ 0.20 m の柱痕が認められ、SP11046 では柱痕上面に抜き取り痕が見られた。また、SP11019 と 11020、SP11026 には根石が、SP11046 には詰石が据えられていた。

遺物は、SP11019 より器種不詳の土器小片 3 点が出土した。また、SP11034 より柱材とみられる木片が出土しているが、遺物として採取されてはいない。重複する柱穴や溝 SD259 からも遺物は出土しておらず、建物の時期を特定することは困難である。

SB19 (第 260 図)

13 区西端付近で検出した掘立柱建物である。図上で復元した。SD289 より先行する。梁間 2 間 (4.09 m)、桁行 2 間 (4.95 m)、床面積約 20.25㎡、主軸方向 N 80.46° E に配された東西棟の総柱建物を復元する。梁間、桁行とも長さが異なり、柱通りは揃わず、平面形も整った矩形とはならないため、参考案として提示する。柱穴は、長径 0.20 ~ 0.34 m の略円ないし不整楕円形等を呈し、残存深 0.10 ~ 0.16 m、底面の標高 16.16 ~ 16.27 m、断面形は概ね逆台形状を呈する。根石や詰石は出土していない。

遺物は、SP13073 より器種不詳の土器小片 1 点が出土した。図化した遺物はない。重複する SD289 も出土遺物を欠くことから、本建物の詳細な時期については不詳である。



第262図 SK129 平・断面
・出土遺物実測図

土坑

SK059 (第261図)

11区中央東端付近で検出した土坑である。長径1.29m、短径1.19m、平面形は南北にやや長い楕円形を呈する。残存深は0.86mと深く、断面形は逆台形状を呈する。埋土は6層に細分され、2層に大別する。上層(1～3層)は、遺構廃絶後の自然堆積層とみられ、灰色系砂・シルトがレンズ状に堆積する。とくに2層は、壁面の崩落に伴う堆積物とみられる。下層(4～6)層は、褐色系の細砂と粘土で、上位2層中にはそれぞれ粘土や細砂のラミナ堆積を認め、滞水下の埋没の可能性が考えられる。井戸枳材やその痕跡、透水層との関係が不明なため、井戸と断定することは困難だが、遺構の性格として素掘り井戸もその候補となろう。後述する出土遺物が乏しい点も、その可能性を示唆するものとも考えられる。

遺物は、図示した以外に、器種不詳の弥生土器や土師質土器、棒状土錘の小片計6点が出土した。実1417と1418は、いずれもマツ属複雑管束亜属を用いた、厚さ1～2cmの板材の小片である。同一個体の可能性もあるが、現状では接合しない。器表面は腐食等が進み、加工痕は不明瞭である。

出土遺物より、中世以降の可能性は想定されるが、詳細な時期を特定することは困難である。

SK129 (第262図)

14区中央付近で検出した土坑である。SP14605上面より掘り込まれる。平面形は、長軸0.70m、短軸0.44m、主軸方向N 36.54° Eに配された、不整隅丸長形状を呈する。残存深は0.19mで、断面形は箱形を呈する。埋土は2層に細分され、にぶい橙色ないし褐灰色粘質土がレンズ状に堆積していた。

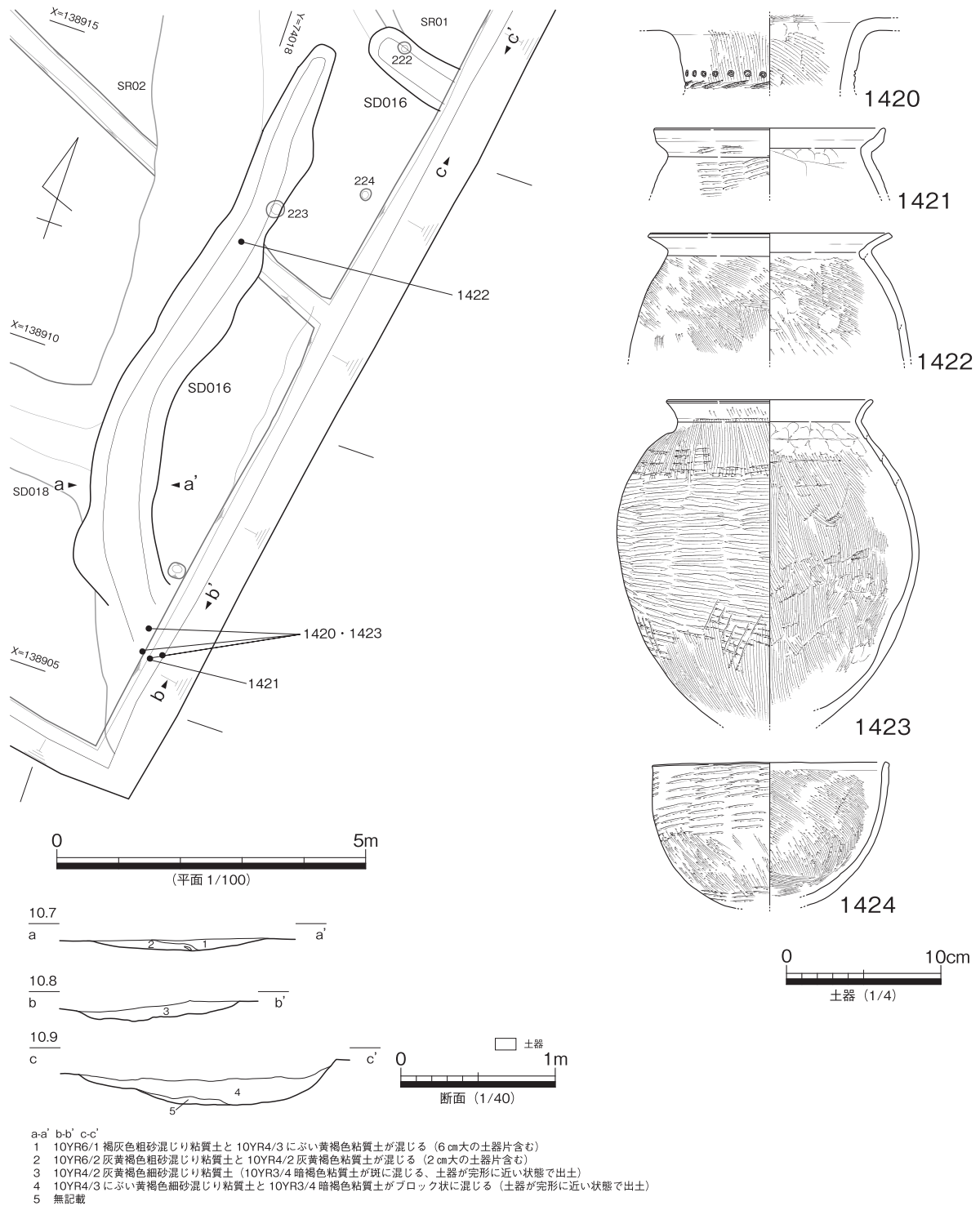
遺物は、図示した以外に器種不詳の土器小片2点が出土した。1419は、サヌカイト製の平基式石鏃である。出土遺物より本遺構の時期を推定することは困難であり、本遺構に先行するSK1421も出土遺物を欠き、したがって本遺構の時期は不明である。

溝

SD016 (第263図)

1区2面南東隅付近で検出した、平面コ字状に配された溝である。北西隅部が途切れるが、一連の溝として調査されている。東西溝の東端は、いずれも調査区外へ延長し、全形は不明である。南北溝の流路方向は概ねN 12.45° Eに配される。南北の東西溝の間は芯々間で9.45m、東西溝の延長1.51m以上を測る。溝は、幅0.59～0.92m、残存深0.07～0.26m、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は1～2層に細分され、褐色系粘質土が概ねレンズ状に堆積していた。

遺物は図示した以外に、弥生土器等の小片が若干量出土している。1420は、弥生土器広口壺の頸部小片。頸基部に竹管文とハケ状工具による刺突文を上下に配し装飾する。1421～1423は同甕である。1421は、口縁端部を上方へ大きく摘み上げ、受け口状の口縁を成形する。1422は、頸部よりくの字



第 263 図 SD016 平・断面・出土遺物実測図

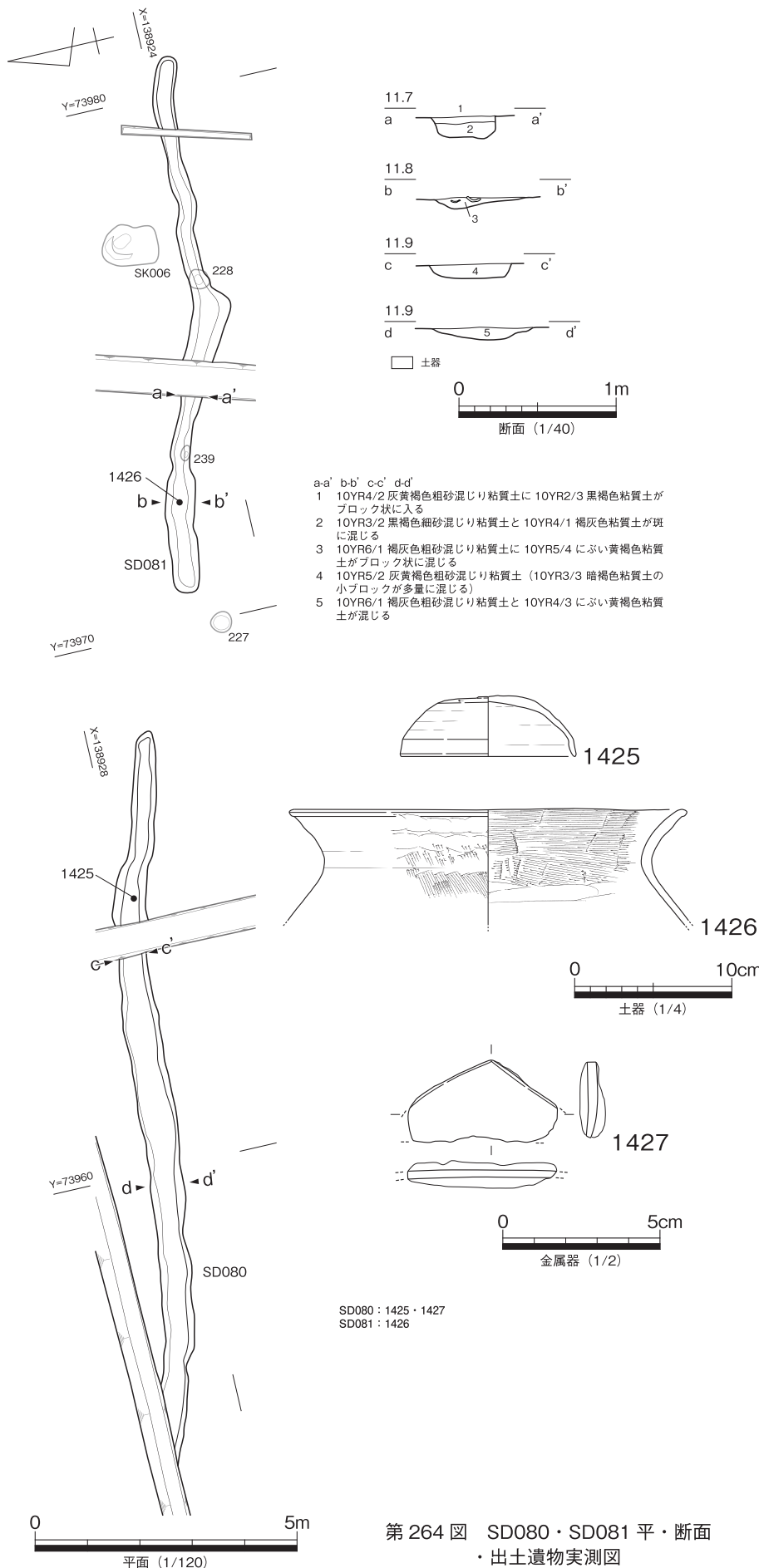
に折り返して口縁部は開き、端部を四角くおさめる。**1423** はタタキ甕で、口縁部は斜め上方へ開き端部は丸くおさめる。体部外面には煤が付着する。**1424** は同鉢である。口縁部は長径 16.0cm 前後、短径 14.0cm 前後の楕円形を呈する。図示した遺物を含め出土遺物は本来 SR02 に帰属するものと考えられ、本遺構の時期を特定することは困難である。

SD080・SD081（第264図）

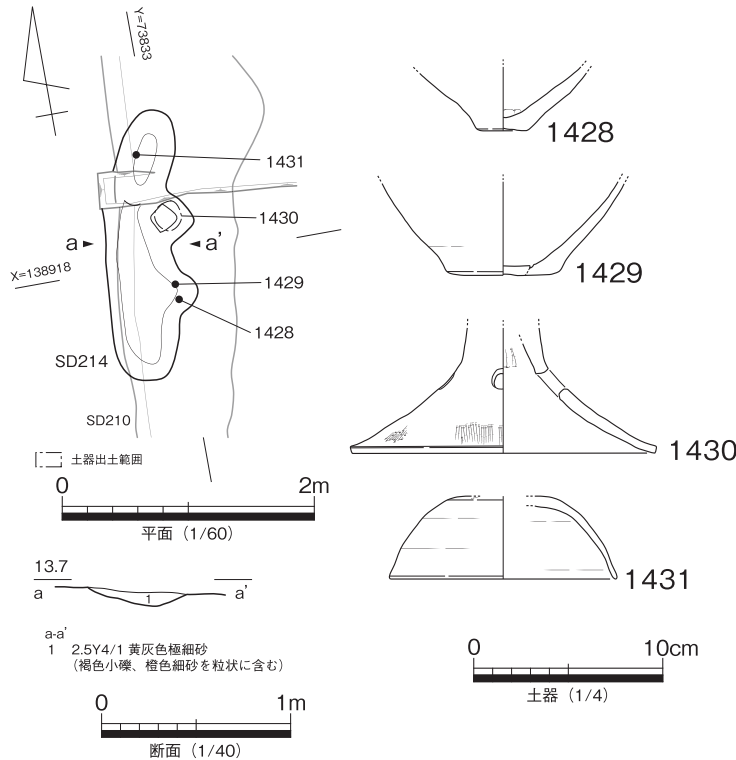
SD080 と SD081 は、いずれも2区1面北半部で検出した東西溝である。両溝は約2.7m途切れるが、流路方向や規模、埋土等より一連の溝である可能性がある。

西側のSD080は、西端は調査区外へ延長し、東端は調査区内で途切れ、東西長約13.2mを検出した。流路方向N78.7°Wに配される。溝は、検出面幅0.45～0.69m、残存深0.08m前後、断面形は浅い皿状ないし箱形を呈する。埋土は、灰褐色系粘質土の単層で、東半部にはブロック土の混入が多量にみられ、人為的に埋め戻された可能性がある。底面の標高は、西端付近で11.8m前後、東端付近で11.7m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。

SD081は、東西両端は調査区内で途切れ、延長約10.5mを検出した。やや蛇行して流下しており、流路方向は概ねN78.95°Wである。溝は、検出面幅0.30～0.67m、残存深0.08～0.15m、



第264図 SD080・SD081 平・断面
・出土遺物実測図



第 265 図 SD214 平・断面・出土遺物実測図

端部をやや外側に肥厚する。長胴甕となる可能性が高い。**1427**は、幅約 4.8cm、厚さ約 3mm の二等辺三角形形状を呈する板状の鉄製品で、底辺部中央は僅かに窪む。形状から火打金の可能性を想定する。出土遺物は、第 2 面包含層や包含層下の SD093 等からの混入の可能性が考えられる。1 面で検出（第 13 図参照）したことから、中世以降の可能性が考えられるが、詳細な時期については不詳である。

SD214 (第 265 図)

6 区 1 面西端付近で検出した南北溝である。SD210 の下面で検出した。南北両端は調査区内で途切れ、延長約 2.1 m を調査した。流路方向 N 11.59° E に配される。検出面幅 0.42 ~ 0.58 m、残存深 0.1 m、断面形は概ね皿状を呈する。平面形は安定した形状を呈していないが、おそらくは柱穴等の遺構が重複しているものとする。埋土は黄灰色極細砂の単層であった。

遺物は図示した以外に、弥生土器壺、甕、鉢等の破片 50 点程度と、器種不詳の土師質土器とみられる土器小片数点が出土した。**1428**は、弥生土器鉢の底部片とみられる。底部はやや突出した、上げ底気味の平底である。**1429**は、同甕の底部片である。全体にマメツや剥離が顕著で、調整等は不明である。**1430**は、同高杯の脚部片。脚柱部と裾部の境付近に、径約 1.2cm の円形透孔を 4 孔穿つ。**1431**は須恵器蓋。焼成不良で、器表面の調整は不明瞭である。6 世紀後葉に位置付けられる。

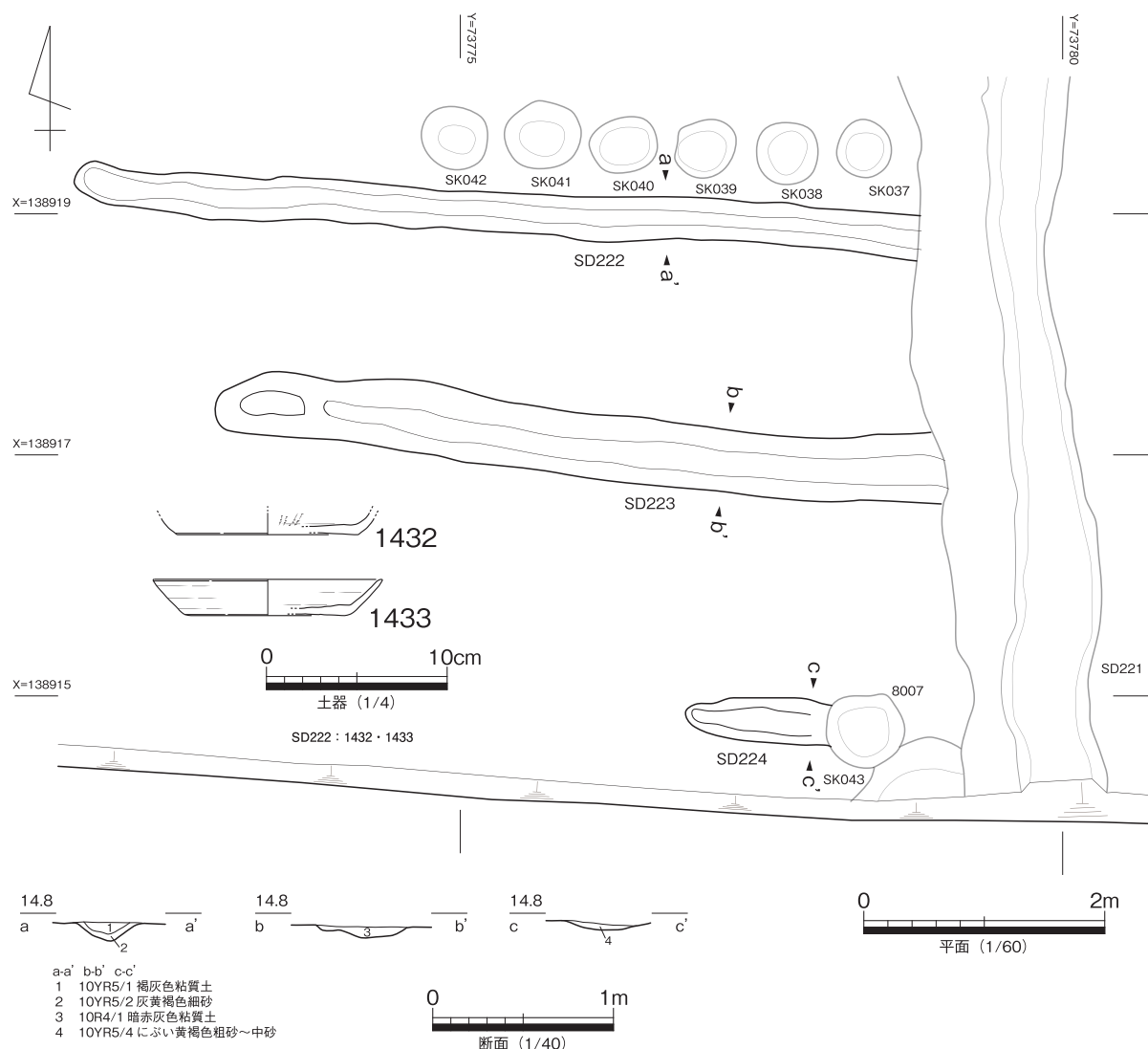
図示した遺物は混入とみられる資料であり、第 1 面で検出した点や出土遺物より、本遺構は中世以降の時期が想定されるが、詳細な時期については不明である。

SD222・SD223・SD224 (第 266 図)

8 区中央部で検出した、3 条の並走する東西溝である。SD222 と SD223 の芯々間距離約 1.9 m、

断面形は皿状ないし箱形を呈する。埋土は 1 ~ 2 層に細分され、褐色系粘質土が水平堆積し、上位層を中心にブロック土の混入がみられた。底面の標高は、西端付近で 11.6 m 前後、東端付近で 11.5 m 前後をそれぞれ測り、本溝も高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。

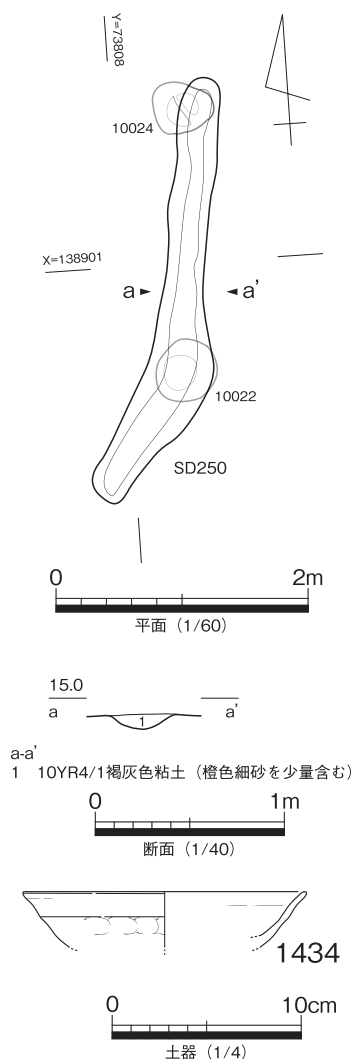
遺物は、図示した以外に、SD080 より弥生土器壺や器種不詳の須恵器等の小片 30 点程度、SD081 より弥生土器甕等の土器小片 20 点程度が出土した。**1425**と**1427**はSD080、**1426**はSD081出土の遺物である。**1425**は須恵器蓋。口縁部はやや歪み、体部外面には焼成中に別の個体が溶着している。**1426**は土師器甕である。口縁部はくの字に外反し、



第266図 SD222・SD223・SD224 平・断面・出土遺物実測図

SD223 と SD224 の同距離約 2.1 m を測る。近似した間隔で溝が配されていたとするなら、SD222 が北限となり、南の調査区外に別の溝が存在する可能性は残る。SD222 と SD223 の東端は、上述した SD221 に切れ、SD221 より東では延長溝は確認されず、西端は調査区内で途切れる。最も長い SD222 で、延長 7.0 m を調査した。流路方向 N 85.85° W 前後と、ほぼ正方位に配される。検出面幅 0.3 ～ 0.5 m 前後、SD222 の残存深 0.10 m、SD223 は同 0.06 m、SD224 は同 0.04 m で、断面形は概ね浅い皿状を呈する。SD222 では、上位に灰色系粘質土、下位に溝機能時と考える灰色系細砂がレンズ状に堆積し、SD223 は粘質土、SD224 は砂の単層であった。SD222 と SD223 の底面は、若干の起伏が見られるものの、概ね 13.65 m 前後で一定する。

遺物は図示した以外に、SD222 より器種不詳の弥生土器とみられる土器小片 40 ～ 50 点、SD223 より弥生土器甕や器種不詳の須恵器小片が 15 点程度出土した。図示した遺物はいずれも SD222 出土資料である。**1432** は須恵器杯の底部片。焼成があまく、ややマメツが顕著だが、内面に火襷痕を認める。9 世紀前葉前後に位置付けられる。**1433** は同皿。口縁部は直線的に開く。9 世紀後葉前後に位置付けられる。いずれも 9 世紀代に位置付けられ、重複する SD093 からの混入資料である。



第267図 SD250 平・断面
・出土遺物実測図

SD250 (第267図)

10区中央部付近で検出した南北溝である。南北両端は調査区内で途切れ、延長約3.5mを調査した。SB12と重複し、切り合い関係より先行する。やや東に屈曲して配され、一定の流路方向を示さない。検出面幅0.3m前後、残存深0.08m、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は、褐灰色粘土の単層であった。

遺物は図示した以外に、弥生土器とみられる器種不詳の土器片や土師器カマド等の小片4点が出土した。1434は和泉型瓦器碗。器表面はマメツやハクリが進み、調整等が観察できないが、器形等より12世紀後半～13世紀前葉を中心とした時期の可能性を想定する。

出土遺物の一部については、重複するSB12と時期が概ね合致することから、建物からの混入の可能性を否定しきれず、本遺構の時期については不明としておきたい。

SD284 (第268図)

13区北西部に位置する溝であり、中世前半のSD280とSX19を切り、2か所に分断された状態で検出されている。検出面幅0.2～0.4m前後、残存深0.05m、断面形は皿状を呈する。

1435は4mm角の角釘。上下端を折損する。

包含層等出土の遺物 (第269～271図)

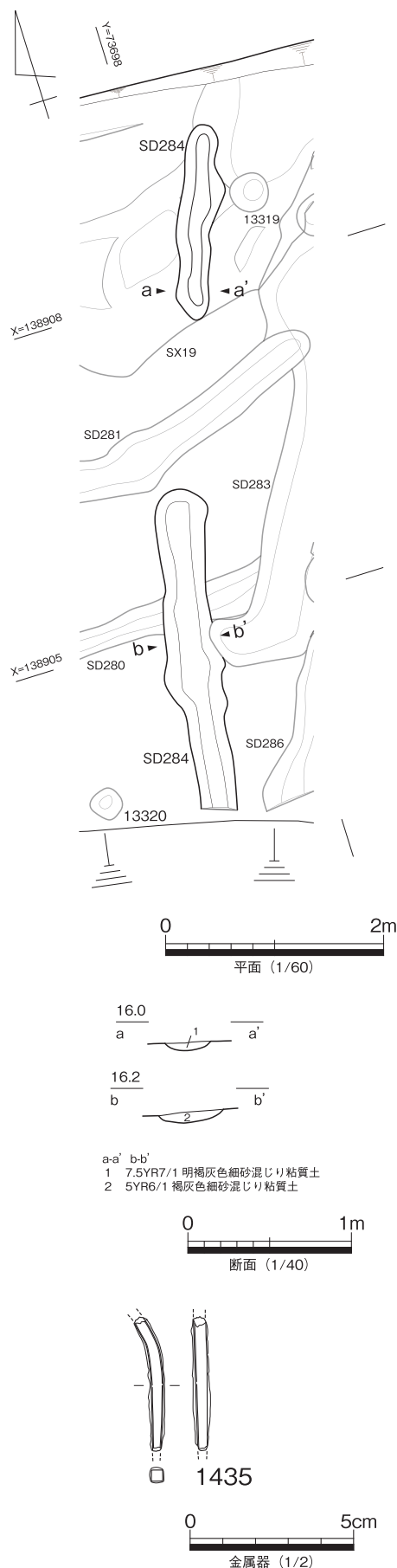
第260～262図には、各区の包含層等より出土した遺物を掲載した。1436～1441は、中世以降の柱穴出土の遺物である。レイアウトミスによりここに掲載する。1436～1439はSP14463出土の資料。

1436～1438は土師質土器杯。1439は瓦質土器鍋である。1440はSP6160出土の石英の小礫で、稜角に敲打痕が見られることから、火打石として報告する。1441は、SP14496出土の滑石製石鍋の底部片である。表裏面には製作時のものとみられる工具痕が残る。また内面には、分割して転用を意図したとみられる溝状の刻線が残される。

1442～1452は1区調査時に出土した資料で、1443は、SX003(旧遺構名)出土資料として調査時に取り上げられているが、調査記録に該当する遺構が見当たらないためここに報告する。1442は須恵器杯蓋。1443は同杯の底部片で、幅広の矩形の高台を付す。飛鳥Ⅳ併行期か。1444・1445はいずれも龍泉窯系青磁Ⅰ類碗の体部片で、内面に片彫蓮花文を施す。釉調より別個体である。1446は同皿Ⅰ類の口縁部片である。1447は備前焼播鉢。内面に3条以上/単位のスリ目を施す。乗岡中世6期に位置付ける。1448は、土師質焼成の管状土錘。ほぼ完形で出土した。1449～1452はサヌカイト製の打製石鏃である。

1453は2区出土のサヌカイト製打製石鏃。

1454～1477は3区出土の資料である。1454は須恵器杯蓋。1455は土師質土器皿。底部は回転ヘラ切り後板状圧痕が見られる。1456は黒色土器B類碗。内外面マメツが顕著だが、体部外面に回転ミ

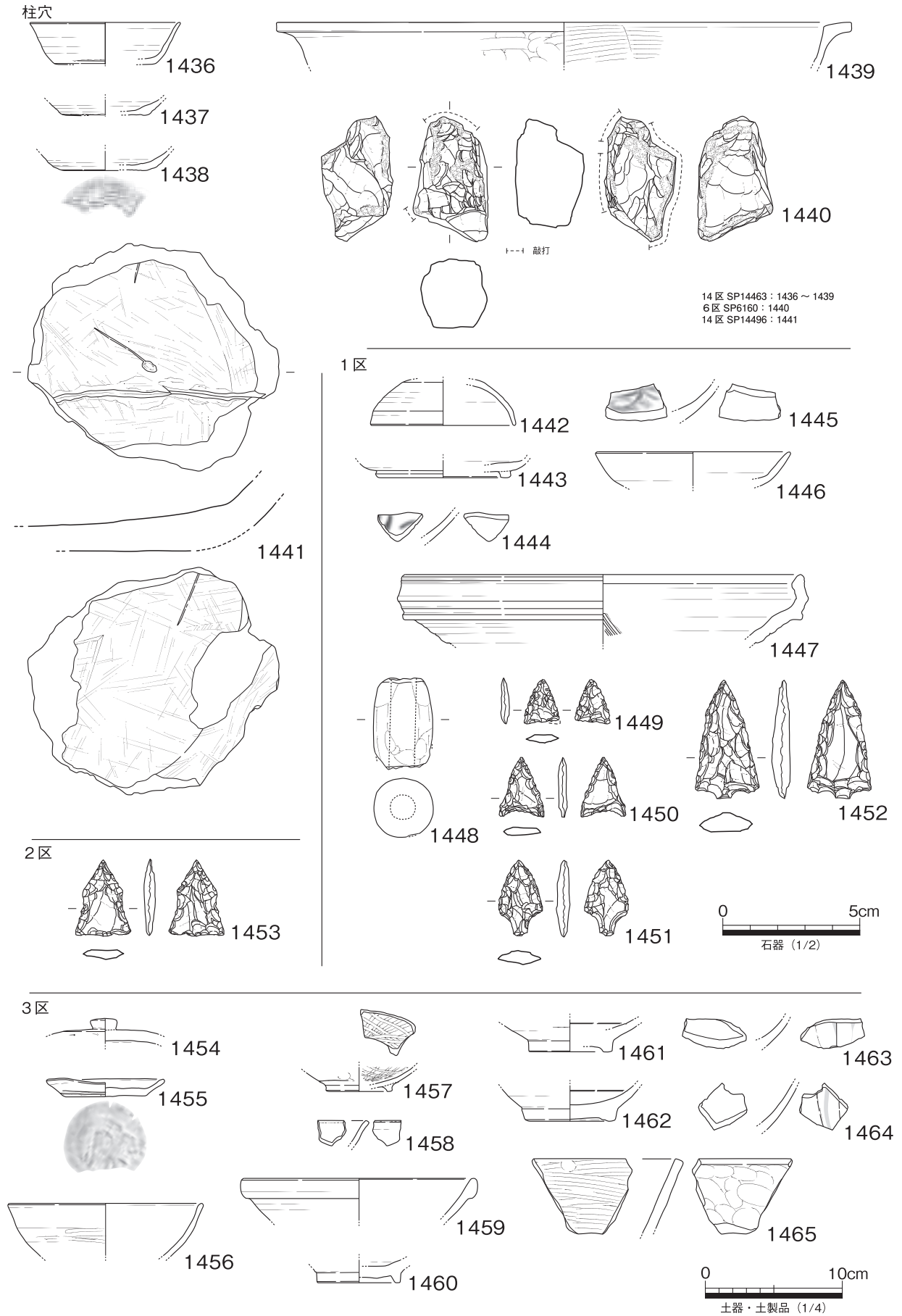


第268図 SD284 平・断面
・出土遺物実測図

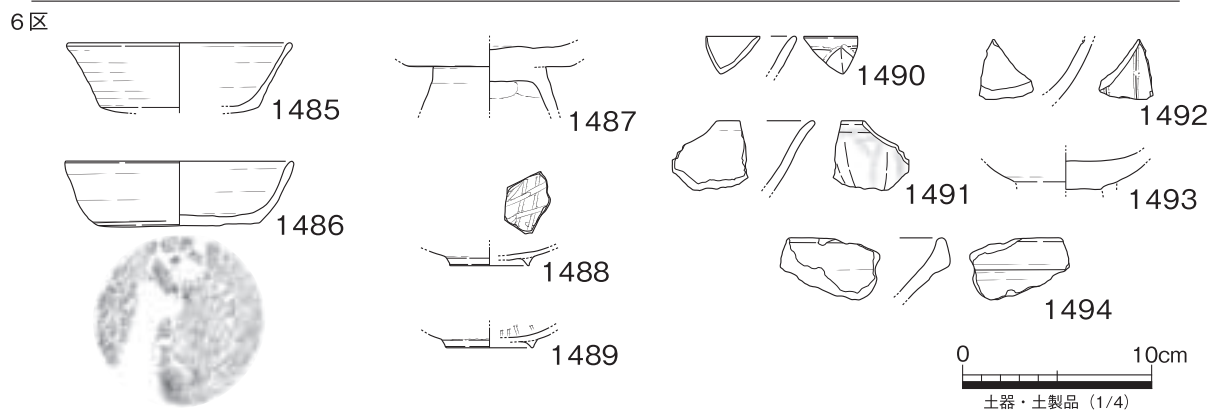
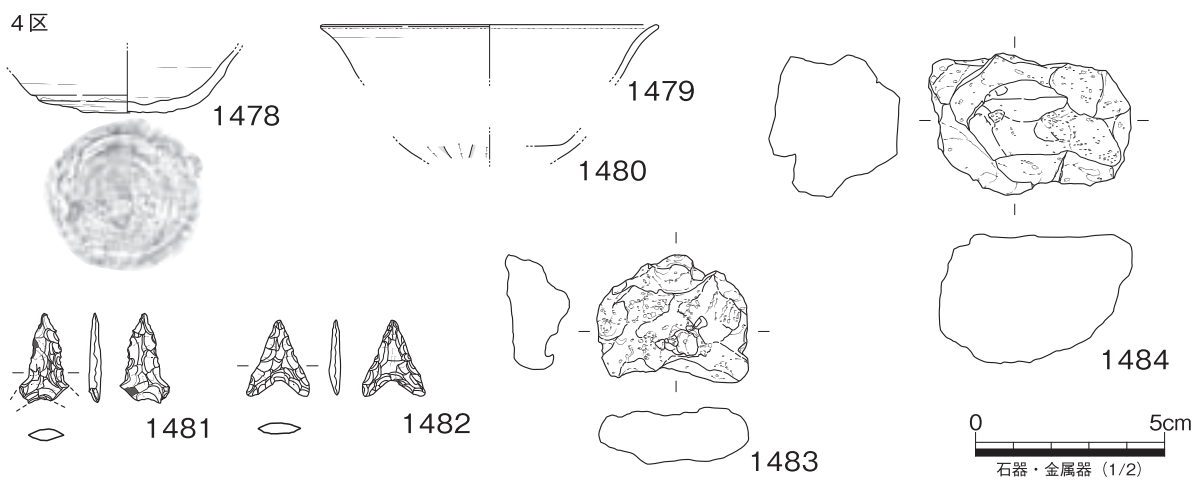
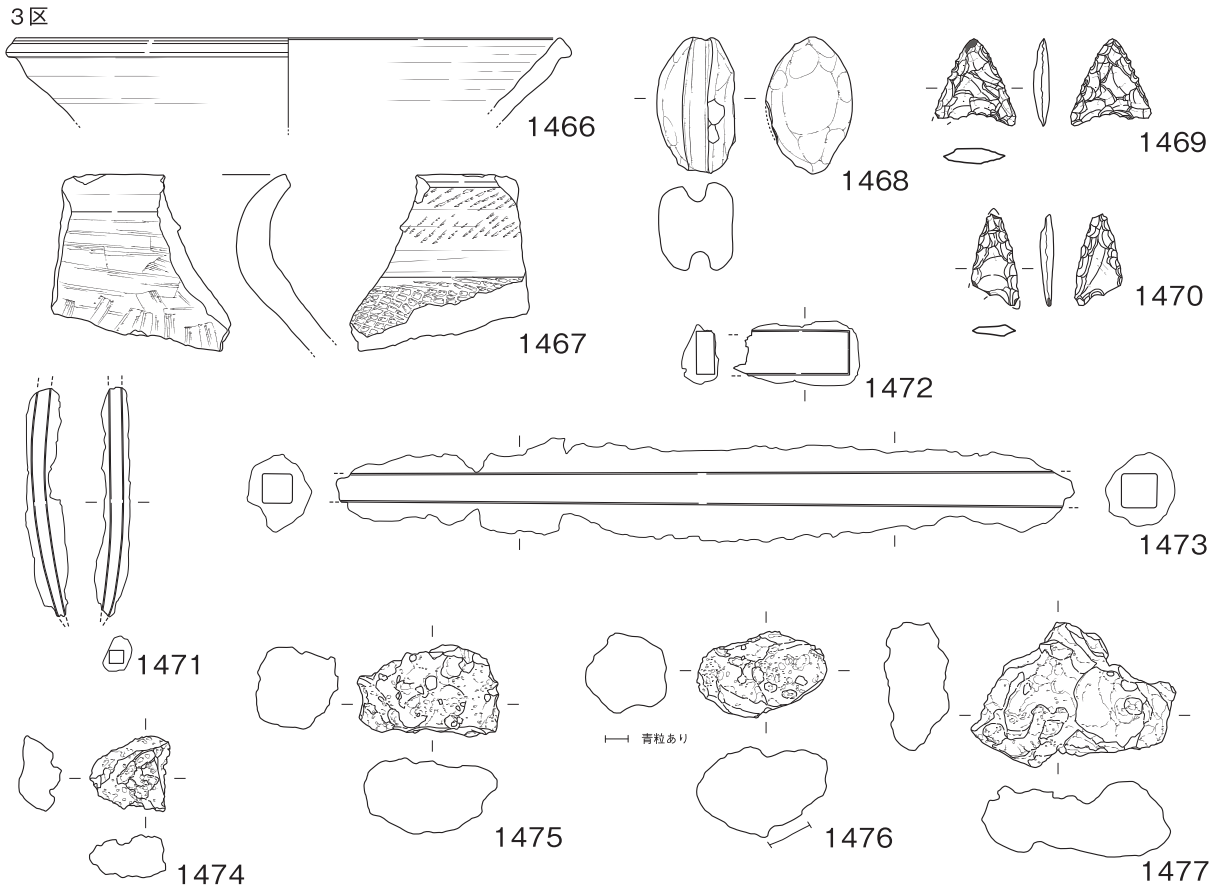
ガキが施す。1457は和泉型瓦器碗の底部片。内面見込みには格子状のミガキを施す。1458は白磁碗Ⅸ類の口縁部片。口縁部は小さく外反して開き、釉を掻き取り口禿げとする。1459は、口縁部が玉縁となる同碗Ⅳ類。1460～1462は同碗の底部片。1462は、高台周辺は露胎で、内面見込みに浅い段が見られる。1461・1462も高台周辺は露胎で、高台内の削りは浅く、いずれも内面見込みに沈線を施すことから碗Ⅳ類の底部片とみられる。1463・1464は、外面に鎬蓮弁文を有する龍泉窯系青磁碗Ⅱ類の体部片である。胎土の色調は相違し、別個体とみられる。1465は瓦質土器鉢の口縁部片である。内面には横方向のハケメを施す。1466は東播系須恵器鉢の口縁部片。端部を下方へ拡張する。Ⅲ-1ないしⅢ-2類。1467は須恵器甕の口縁部片。体部より連続して口縁部に格子タタキを施し、緩やかに外反して、端部を矩形におさめる。1468は、土師質焼成の有溝土錘。ほぼ完形。1469と1470はサヌカイト製の石鏃である。1471は4mm角の角釘で、上下端を折損する。1472は、幅約1.2cm、長さ3.1cm以上、厚さ約5mmの矩形板状の鉄片、刀子柄の可能性はある。1473は約8mm角の棒状の鉄製品で、不明鉄器。用途不明。1474～1477は、鍛冶滓の小片である。

1478～1483は4区出土の資料である。1478は、土師質土器杯の底部片。底部は完存し、ヘラ切り底である。1479は白磁碗Ⅸ類。口縁部の釉を掻き取る。1480は体部外面に鎬蓮弁文を有する、龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。1481と1482は、サヌカイト製の打製石鏃である。1483と1484は、鍛冶滓の小片。

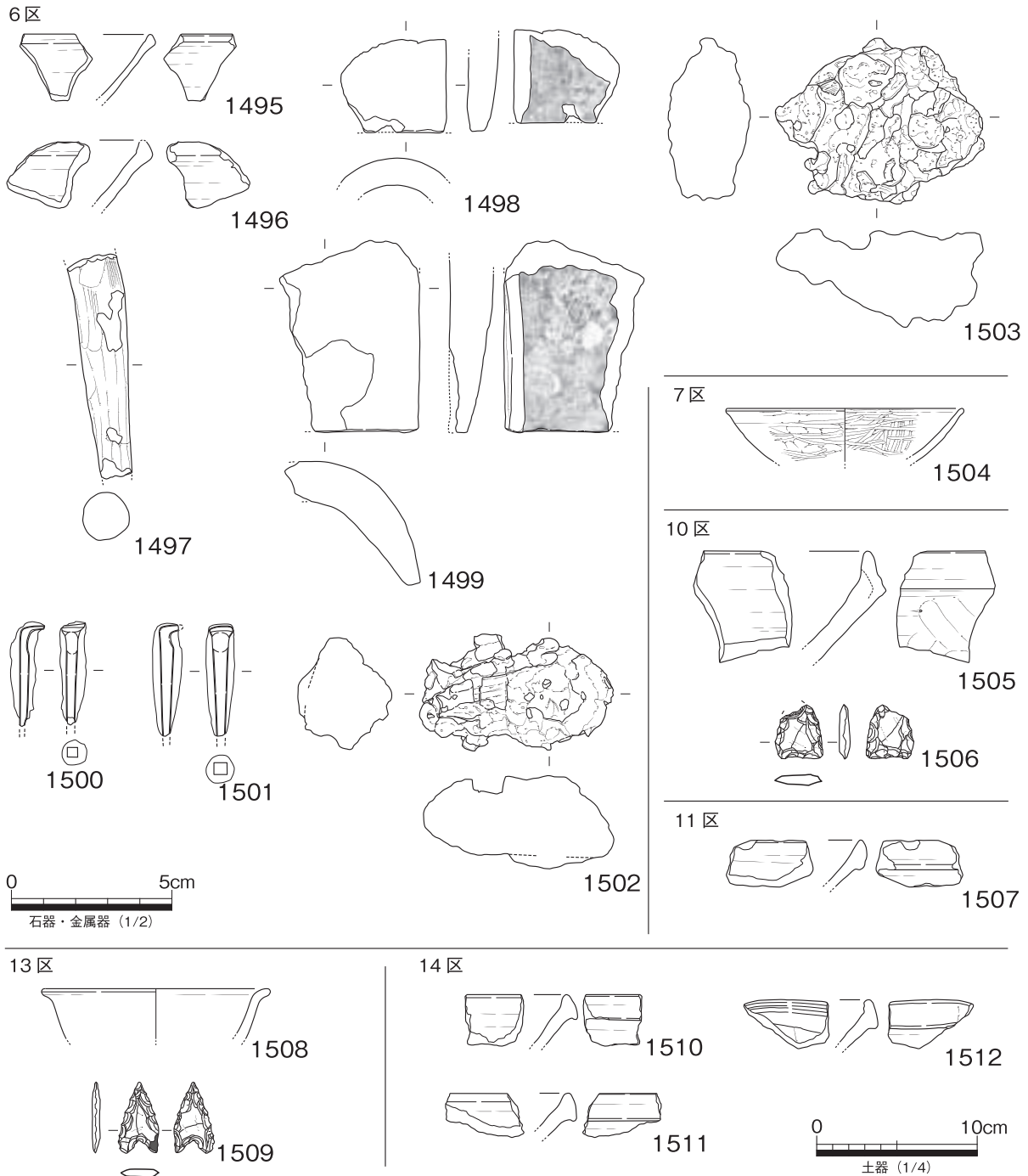
1485～1505は6区出土の資料で、1485・1488・1497～1499はSD6031(旧遺構名)出土資料として調査時に取り上げられているが、調査記録に該当する遺構が見当たらないためここに報告する。1485・1486は土師質土器杯。1486は底部の一部を欠損する以外は完形。底部は回転ヘラ切りである。1487は、土師質土器台付杯の脚台部片として図示した。杯部内面には煤が付着する。1488・1489は、いずれも和泉型瓦器碗の底部片である。1488の内面には格子状の、1489には平行線状のミガキを施す。1490～1492は、外面に鎬蓮弁文を有する龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。釉調等より、1490と1491は同一個体の可能性があるが、1492とは別個体である。1493は、内面見込みに圏線と印刻を施す龍泉窯系青磁碗の



第 269 図 包含層出土遺物実測図 1



第270図 包含層出土遺物実測図2



第 271 図 包含層出土遺物実測図 3

底部片。高台内は無釉。1494～1496は東播系須恵器鉢の口縁部小片。1494・1496はⅢ-2ないしⅢ-3類、1495はⅢ-1類であろう。1497は土師質土器足釜の脚部片である。1498・1499は丸瓦。1500は3mm角、1501は4mm角のそれぞれ角釘で、頭部を折り曲げる。1502・1503は鍛冶滓の小片。

1504は7区出土資料で、十瓶山周辺窯産の須恵器碗である。外面には回転ミガキ、内面はハケ後分割ミガキを施す。

1505・1506は10区出土資料。1505は、備前焼播鉢の口縁部片である。乗岡編年中世5期か。1506はサヌカイト製の打製石鏃。

1507 は 11 区出土資料で、東播系須恵器鉢の口縁部片である。Ⅲ -3 類か。

1508・1509 は 13 区出土資料。1508 は龍泉窯系青磁碗の口縁部片。上田分類D類。1509 はサヌカイト製の打製石鏃である。

1510～1512 は 14 区出土資料で、いずれも東播系須恵器鉢の口縁部片である。Ⅲ -2 もしくはⅢ -3 類であろう。

引用・参考文献

蔵本晋司 2009「弥生時代後期～古墳時代前期初頭の土器について」『県道多度津丸亀線道路改良事業(多度津工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 庄八尺遺跡』, 香川県教育委員会

蔵本晋司

報告書

東信男・佐藤亜聖ほか 2008『中の池遺跡・平池東遺跡 総合運動公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』, 丸亀市教育委員会・財団法人元興寺文化財研究所

伊藤淳史 2000「京都大学総合人間学部構内 AR25 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1996 年度』, 京都大学埋蔵文化財研究センター

片桐孝浩 2002『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 39 冊 原間遺跡 I』, 香川県教育委員会

片桐孝浩 2006『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小山・南谷遺跡 II』, 香川県教育委員会

森格也・古野徳久 1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 3 冊 前田東・中村遺跡』, 香川県教育委員会

森格也・信里芳紀・長井博志 2004『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 47 冊 成重遺跡 I』, 香川県教育委員会

森格也・長井博志 2005『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 54 冊 成重遺跡 II』, 香川県教育委員会

森下友子・蔵本晋司 1992『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 1 冊 東山崎・水田遺跡』, 香川県教育委員会

一般国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第9冊

内間遺跡
第1分冊

2024年1月31日

編集 香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4
Tel 0877-48-2191
E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp

発行 香川県教育委員会
印刷 ワールド印刷株式会社